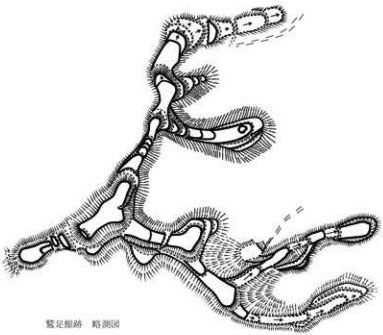
山元町文化財調査報告書第 17 集

鷲足館跡

第１～５次発掘調査

－土砂採取事業に係る発掘調査報告書－



鷲足館跡　略測図

平成３０年３月

宮城県亘理郡山元町教育委員会

深山総合開発株式会社

序　　文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に分布しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。それらは先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びついた埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通して貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の鷲足館跡の発掘調査は、山元町鷲足地区の土砂採取事業に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成２４～２８年度にかけて当教育委員会が実施したものであります。今回の調査によって、中世の山城跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、その調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際し御協力くださいました関係機関ならびに関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

平成３０年３月

山元町教育委員会
教育長　菊池　卓郎

例　言

1．本書は、宮城県亘理郡山元町鷲足字大館地内に所在する鷲足館跡１～５次調査（宮城県遺跡登録番号 14043）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、鷲足地区土砂採取工事に伴う本発掘調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、平成 24 ～ 29 年度に、調査原因となった事業主体者である深山総合開発株式会社から業務委託を受けた山元町が実施した。

3．本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。現地発掘調査・報告書作成業務に携わった職員の体制は、本書第１章第４節（14 頁）に掲載した。

4．発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
高橋栄一・山口貴久（宮城県教育庁文化財保護課）、日下和寿（白石市教育委員会）、佐藤洋（仙台市教育委員会）、田中則和、佐藤信行、高橋圭次、久保智康、深山総合開発株式会社、宮城県教育庁文化財保護課（敬称略）

5．発掘調査の方法等については、本書第１章第５節にまとめた。

6．本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系Ｘ系による。発掘区の測量基準点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災後の値を基本としている。また、それぞれの基準点の位置は本書第 9-1・9-2 図の図中に表記した。

WA1 :X=-224880.558、Y=2327.948、Z=65.952m　　H26-4:X=-224955.618、Y=2197.494、Z=103.208m
WA9 :X=-224901.250、Y=2282.053、Z=76.532m　　H26-5:X=-224938.839、Y=2178.545、Z=105.510m
KWA4:X=-224976.467、Y=2219.210、Z=96.154m　　H26-6:X=-224947.815、Y=2208.315、Z=102.320m
KWA3:X=-224966.105、Y=2215.140、Z=96.872m　　WA37 :X=-224910.865、Y=2002.472、Z=129.994m
KWA5:X=-224980.965、Y=2238.778、Z=89.242m　　WA38 :X=-224903.981、Y=2010.170、Z=128.364m
KWA2:X=-224923.925、Y=2241.308、Z=84.702m　　WA40 :X=-224920.728、Y=1983.496、Z=129.794m

7．標高は、水準点を基にした海抜高度で示した。

8．本書の第２図は、土地分類基本調査における 1/50,000 地形分類図「角田」をもとに作成したものである。

9．本書の第３図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 の地形図を複製して作成したものである。

10．本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帖 2010 年版」（小山・竹原 1973）を参照した。

11．石器の石材については、実測者が肉眼観察を行った。

12．陶器の産地・年代については、仙台市教育委員会の佐藤洋氏にご教示いただいた。

13．本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」（文化庁文化財部記念物課 2010a・b）を参考にし、以下の通りとしたが、略号を設けなかった遺構の表記については第１章第５節に示した。
ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：柱穴列跡　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑　Ｐ：柱穴・穴

14．出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。
Ａ：縄文土器　Ｃ：土師器・かわらけ　Ｅ：須恵器　Ｉ：陶器　Ｊ：磁器　Ｋ：石器　Ｎ：金属製品

15．遺構・遺物実測図の主な縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。

16．遺構内の傾斜の部分は「 ┰┰ 」、後世の撹乱は「撹」と表記し、その傾斜部は「 ┯ 」で示した。

17．本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、山田が執筆した。
図版の版組みは山田・佐伯・渡邊、報告書編集は山田・佐伯が行った。

18．発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

調 査 要 項

遺　跡　名：**鷲足（わしあし）館跡**（宮城県遺跡地名表登載番号 14043　遺跡記号 WA）

所　在　地：宮城県亘理郡山元町鷲足字大舘地内

調 査 原 因：鷲足地区土砂採取工事に係る本発掘調査

調 査 期 間：1 次調査　平成 25(2013)年 2 月 22 日～3 月 8 日

2 次調査　平成 25(2013)年 5 月 22 日～6 月 10 日

3 次調査　平成 26(2014)年 1 月 6 日～3 月 12 日

4 次調査　平成 26(2014)年 9 月 8 日～10 月 16 日、平成 27(2015)年 1 月 13 日～1 月 16 日

5 次調査　平成 29(2017)年 2 月 13 日～3 月 10 日

調 査 面 積：10,320 ㎡

（1 次調査：770 ㎡/2 次調査：960 ㎡/3 次調査：4230 ㎡/4 次調査 3050 ㎡/5 次調査 1220 ㎡）

調 査 主 体：山元町教育委員会

調 査 担 当：山元町教育委員会生涯学習課

【本発掘調査（現地調査）】

1～5 次調査　山田　隆博　【山元町教育委員会　生涯学習課】

1～2 次調査　藤田　祐　【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】

【整理・報告書】

山田　隆博　【山元町教育委員会　生涯学習課】

藤田　祐　【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】

佐伯　奈弓　【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】

山口　貴久　【宮城県教育庁文化財保護課】

調 査 協 力：宮城県教育庁文化財保護課

深山総合開発株式会社

目　次

序文
例言・調査要項・目次・挿図目次・表目次
第１章　遺跡の概要 …… 1
第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 1
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 1
第３節　鷲足館跡の概要 …… 9
第４節　発掘調査に至る経緯 …… 13
第５節　発掘調査の経過と方法 …… 14

第２章　発掘調査の成果 …… 19
第１節　基本層序 …… 19
第２節　発見された遺構と遺物の概要 …… 20
１．平場 …… 39
２．土塁跡 …… 78
３．溝跡 …… 81
４．掘立柱建物跡、柱穴列跡、その他の柱穴・小穴 …… 92
５．土坑 …… 156
６．出土遺物 …… 159

第３章　自然科学分析 …… 163
第１節　はじめに …… 163
第２節　鷲足館跡第１～４次調査における放射性炭素年代(AMS 測定) …… 165

第４章　総括 …… 169
第１節　出土遺物の特徴と時期 …… 169
第２節　検出遺構の特徴と時期 …… 170
第３節　まとめ …… 181

註
引用・参考文献
報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図　山元町と鷲足館跡の位置 …… 1
第 2 図　鷲足館跡及び山元町内の地形分類図 …… 2
第 3 図　鷲足館跡の位置と山元町内の遺跡分布 …… 4
第 4 図　鷲足館跡　略測図 …… 10
第 5 図　鷲足館跡の現況 …… 11
第 6 図　鷲足館跡からの眺望 …… 12
第 7 図　鷲足館跡　調査箇所 …… 15
第 8 図　鷲足館跡 1～5 次調査
全体図・個別平面図　掲載区分図…… 20
第 9-1 図　鷲足館跡　全体図(1)－A～D 区－ …… 21・22
第 9-2 図　鷲足館跡　全体図(2)－E 区－ …… 23
第 10 図　鷲足館跡　個別平面図(1) …… 24
第 11 図　鷲足館跡　個別平面図(2) …… 25
第 12 図　鷲足館跡　個別平面図(3) …… 26
第 13 図　鷲足館跡　個別平面図(4) …… 27
第 14 図　鷲足館跡　個別平面図(5) …… 28
第 15 図　鷲足館跡　個別平面図(6) …… 29
第 16 図　鷲足館跡　個別平面図(7) …… 30
第 17 図　鷲足館跡　個別平面図(8) …… 31
第 18 図　鷲足館跡　個別平面図(9) …… 32
第 19 図　鷲足館跡　個別平面図(10) …… 33
第 20 図　鷲足館跡　個別平面図(11) …… 34
第 21 図　鷲足館跡　個別平面図(12) …… 35
第 22 図　鷲足館跡　個別平面図(13) …… 36
第 23 図　鷲足館跡　個別平面図(14) …… 37
第 24 図　鷲足館跡　個別平面図(15) …… 38
第 25 図　鷲足館跡 1～5 次調査　平場の位置 …… 39
第 26 図　鷲足館跡　平場 A-1～2、平場 B-1
エレベーション図 …… 41
第 27 図　鷲足館跡　A 区　平場 A-1・平場 B-1
土層断面図 …… 42
第 28 図　鷲足館跡　平場 A-1(第Ⅰ期)・平場 A-2・平場 B-1
平面図 …… 43・44
第 29 図　鷲足館跡　平場 A-1(第Ⅱ期)　平面図 …… 45・46
第 30 図　平場 A-1・平場 B-1 の状況 …… 47
第 31 図　鷲足館跡　平場 A-3、縦斜面 1、平場 B-2～9
エレベーション図 …… 49
第 32 図　鷲足館跡　B 区　縦斜面 1　土層断面図…… 53・54
第 33 図　鷲足館跡　A 区　平場 A-1・平場 B-1
土層断面図 …… 55
第 34 図　縦斜面 1・平場 A-3 の状況 …… 56
第 35 図　鷲足館跡　平場 A-3(第Ⅰ期)・縦斜面 1(第Ⅰ期)・
平場 B-2～5　平面図 …… 57・58
第 36 図　鷲足館跡　平場 A-3(第Ⅱ期)・縦斜面 1・
平場 B-6～9　平面図 …… 59・60
第 37 図　平場 A-4 の状況 …… 61
第 38 図　鷲足館跡　平場 A-4、平場 B-10
エレベーション図 …… 62
第 39 図　鷲足館跡　平場 A-4、平場 B-10
平面図・断面図 …… 63・64
第 40 図　平場 A-5 の状況(1) …… 65
第 41 図　平場 A-5 の状況(2) …… 66
第 42 図　鷲足館跡　平場 A-5、平場 B-13・14
エレベーション図 …… 67
第 43 図　平場 B-12・13 の状況 …… 69
第 44 図　鷲足館跡　平場 A-5・B-13・14 土層断面図、
平場 B-11・12　エレベーション図 …… 70
第 45 図　鷲足館跡　平場 A-5・縦斜面 2・平場 B-11～14
平面図 …… 71・72
第 46 図　平場 A-6 の状況 …… 73
第 47 図　鷲足館跡　平場 A-6　エレベーション図 …… 74
第 48 図　鷲足館跡　平場 A-6　平面図 …… 75・76
第 49 図　土塁跡 1　調査前の状況(南から) …… 78
第 50 図　土塁跡 1　平面・断面図 …… 79
第 51 図　土塁跡 1　完掘状況・土層断面 …… 80
第 52 図　SD1・2 溝跡　完掘状況(西から) …… 81
第 53 図　SD1・2 溝跡　平面・断面図 …… 82
第 54 図　SD3～5 溝跡　完掘状況(南東から) …… 83
第 55 図　SD3～5 溝跡　平面・断面図 …… 84
第 56 図　SD6 溝跡　完掘状況(北から) …… 85
第 57 図　SD6 溝跡　平面・断面図 …… 86
第 58 図　SD7 溝跡　平面・断面図 …… 87
第 59 図　SD9 溝跡　断面(南から) …… 88
第 60 図　SD8・9 溝跡　平面・断面図 …… 89
第 61 図　SD10 溝跡　完掘状況
(写真上段：北西から/写真下段：南東から) …… 90
第 62 図　SD10 溝跡　平面・断面図 …… 91
第 63 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　掲載区分図 …… 94
第 64 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　平面図(1)
－SB1～16・SA1～11－ …… 95・96
第 65 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　平面図(2)
－SA12～19－ …… 97・98
第 66 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　平面図(3)
－SA20～32－ …… 99・100
第 67 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　平面図(4)
－SA33・39～41－ …… 101
第 68 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　平面図(5)
－SB17～19・SA34～38－ …… 102
第 69 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　平面図(6)
－SB20～30・SA42～49・51～54－ …… 103・104
第 70 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　平面図(7)
－SA50・55～70－ …… 105・106

第 71 図　掘立柱建物跡・柱穴列跡　平面図(8)
－SB31～33－ …… 107
第 72 図　SB1・2 掘立柱建物跡 …… 110
第 73 図　SB3・4 掘立柱建物跡 …… 111
第 74 図　SB5・6 掘立柱建物跡 …… 112
第 75 図　SB7・8 掘立柱建物跡 …… 113
第 76 図　SB9・10 掘立柱建物跡 …… 114
第 77 図　SB11・12 掘立柱建物跡 …… 115
第 78 図　SB13・14 掘立柱建物跡 …… 116
第 79 図　SB15・16 掘立柱建物跡 …… 117
第 80 図　SB17・18 掘立柱建物跡 …… 118
第 81 図　SB19 掘立柱建物跡 …… 119
第 82 図　SB20・21 掘立柱建物跡 …… 119
第 83 図　SB22～24 掘立柱建物跡 …… 120
第 84 図　SB25・26 掘立柱建物跡 …… 121
第 85 図　SB27・28 掘立柱建物跡 …… 122
第 86 図　SB29・30 掘立柱建物跡 …… 123
第 87 図　掘立柱建物跡　完掘状況・柱穴断面(1) …… 124
第 88 図　掘立柱建物跡　完掘状況・柱穴断面(2) …… 125
第 89 図　SB31・32 掘立柱建物跡 …… 126
第 90 図　SB33 掘立柱建物跡 …… 127
第 91 図　平場 A-6　掘立柱建物跡　完掘状況 …… 127
第 92 図　SA1～4 柱穴列跡 …… 130
第 93 図　SA5～7 柱穴列跡 …… 131
第 94 図　SA8～11 柱穴列跡 …… 132
第 95 図　SA12～14 柱穴列跡 …… 133
第 96 図　SA15～18 柱穴列跡 …… 134
第 97 図　SA19～21 柱穴列跡 …… 135
第 98 図　SA22・23 柱穴列跡 …… 136
第 99 図　SA24～26 柱穴列跡 …… 137
第 100 図　SA27～30 柱穴列跡 …… 138
第 101 図　SA31～34 柱穴列跡 …… 139
第 102 図　SA35～38 柱穴列跡 …… 140
第 103 図　SA39～41 柱穴列跡 …… 141
第 104 図　SA42～44 柱穴列跡 …… 142
第 105 図　SA45～47 柱穴列跡 …… 143
第 106 図　SA48～50 柱穴列跡 …… 144
第 107 図　SA51～54 柱穴列跡 …… 145
第 108 図　SA55～58 柱穴列跡 …… 146
第 109 図　SA59～62 柱穴列跡 …… 147
第 110 図　SA63～65 柱穴列跡 …… 148
第 111 図　SA66～68 柱穴列跡 …… 149
第 112 図　SA69・70 柱穴列跡 …… 150
第 113 図　平場 A-3　柱穴列跡　完掘状況 …… 150
第 114 図　平場 A-5　柱穴列跡　完掘状況 …… 151
第 115 図　SK1・2 土坑　平面・断面図 …… 156
第 116 図　SK3・4 土坑　平面・断面図 …… 157
第 117 図　SK5～7 土坑　平面・断面図 …… 158
第 118 図　鷲足館跡 1～5 次調査　出土遺物(1)
－SB・Pit 出土遺物－ …… 159
第 119 図　鷲足館跡 1～5 次調査　出土遺物(2)
－整地層・検出面出土遺物－ …… 160
第 120 図　鷲足館跡 1～5 次調査　出土遺物(3)
－写真図版－ …… 161
第 121 図　炭化物サンプル採取地点 …… 164
第 122 図　暦年較正年代グラフ(参考) …… 168
第 123 図　主要遺構の重複関係 …… 171
第 124 図　平場 A-1・平場 A-2 の主要遺構の配置 …… 173
第 125 図　平場 A-3・緩斜面 1 の主要遺構配置 …… 176
第 126 図　平場 A-4・平場 A-5・緩斜面 2 の主要遺構配置 …… 179
第 127 図　平場 A-6 の主要遺構配置 …… 181
第 128 図　鷲足館跡 1～5 次調査　各平場の位置関係 …… 183
第 129 図　鷲足館跡(1～5 次調査) 掘立柱建物跡模式図 …… 184
第 130 図　平場 A-1～平場 A-5 の登城経路 …… 187
第 131 図　鷲足館跡周辺の中世遺跡 …… 188

表 目 次

第 1 表　山元町遺跡一覧 …… 5
第 2 表　鷲足館跡に関する文献及び記載内容一覧 …… 9
第 3 表　鷲足館跡 1～5 次調査に係る事務処理状況 …… 13
第 4 表　鷲足館跡　調査体制（現場・整理） …… 14
第 5 表　鷲足館跡　掘立柱建物跡（SB1～33）一覧表 …… 109
第 6 表　柱穴列の検出位置一覧表 …… 128
第 7 表　鷲足館跡　柱穴列跡（SA1～70）一覧表 …… 129
第 8 表　鷲足館跡 1～5 次調査　検出柱穴・小穴検出位置及び掲載図版一覧 …… 152
第 9-1 表　鷲足館跡　ピット（柱穴・小穴）　属性表(1) …… 153
第 9-2 表　鷲足館跡　ピット（柱穴・小穴）　属性表(2) …… 154
第 9-3 表　鷲足館跡　ピット（柱穴・小穴）　属性表(3) …… 155
第 10 表　鷲足館跡　炭化物試料採取遺構・層位一覧 …… 163
第 11 表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値） …… 167
第 12 表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較生用 ^{14}C 年代、較正年代） …… 167
第 13 表　鷲足館跡 1～5 次調査　出土中世陶器・施釉陶器一覧 …… 169
第 14 表　鷲足館跡 1～5 次調査　各平場の構成遺構一覧 …… 171
第 15 表　各平場の標高・面積と配置された遺構種別一覧 …… 182

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約 40km 離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる（第１図）。町域は南北約 10km、東西約 5km の長方形を呈する。町の西辺には、宮城・福島県境で二つに枝分かれした阿武隈山地の東支脈が南北に連なり、東辺は太平洋に面している。町域西半は、阿武隈山地に源を発する山麓丘陵地ならびに小河川により解析された櫛状の谷地形となり、谷中平野が形成されている。その東方に広がる沖積地を挟んで、沿岸部には４列の浜堤（第Ⅱ浜堤列・第Ⅲａ～ｃ浜堤列）が海岸線に平行する（伊藤 2006、藤本・松本 2012）。

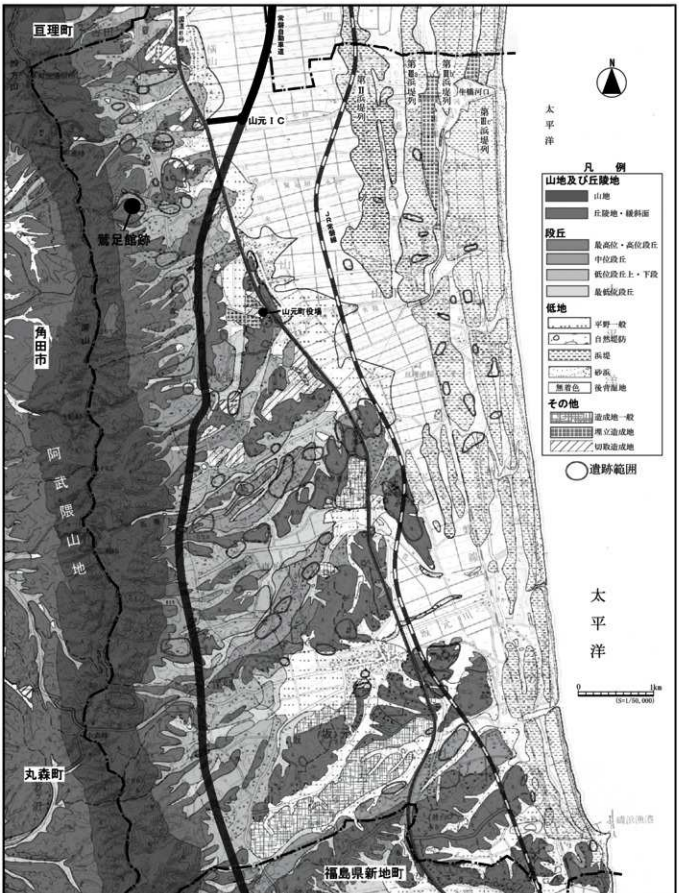
鷲足館跡（宮城県遺跡登録番号 14043）は、町域の北西部に位置し、海岸線からは 5km 余り西方の丘陵地に立地する（第２図）。遺跡として登録されている範囲は、南北 400m、東西 500mほどで、その現況は山林である。標高は、遺跡範囲西端の丘陵頂部の尾根付近が最も高く、130m を測る。そこから、東に向かって南北方向に２つの尾根が延び、その東端付近での標高は 50m となる。館跡が立地する丘陵の尾根は比較的狭い痩せ尾根で、その背後は急傾斜な谷に囲まれており、その登城は尾根伝いでなければ容易ではない。一方、丘陵上からは、町域東辺の太平洋、南北に広がる仙台平野を一望できる。以上のように、鷲足館跡が立地する地形は、防御・眺望の面からみて、山城の造営に適した地理的環境にあるといえる。

第１図　山元町と鷲足館跡の位置

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

山元町には、現在まで 100 余りの遺跡が登録されている（第３図、第１表）。その分布は、立地面からは阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく３つに分けることができる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がみられる。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体を占めるのは古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見した遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が多い。近年、町内では、常磐自動車道（県境－山元間）建設工事、それに伴い実施された周辺地区の開発事業、そして、平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災の復興事業等に伴う大規模な発掘調査が継続的に進められており、これまで知られていなかった町の歴史が飛躍的に明らかとなってきている。

以下、代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。



第２図　鷲足館跡及び山元町内の地形分類図

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡(10)、上宮前北遺跡(109)、前期～中期の西石山原遺跡(84)、中期後半の南山神Ｂ遺跡(89)、中期末～後期前葉の谷原遺跡(67)、中期～晩期の中島貝塚(4)、後・晩期の涌沢遺跡(107)、晩期の中筋遺跡(80)などがある。

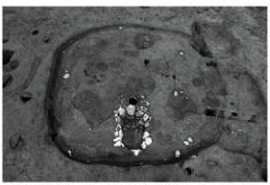
北経塚遺跡では、平成 15･21･23 年度に山元町教育委員会(以下、「町教委」)が調査を行い、前期初頭の竪穴建物跡・土坑・遺物包含層・ピット群などが検出され、前期初頭の上川名Ⅱ式の古い段階の土器群や石器が出土した(町教委 2004・2010・2013)。**上宮前北遺跡**では、平成 24 年度に宮城県教育庁文化財保護課(以下、「県教委」)が実施した調査で、早期末～前期初頭の遺物包含層・竪穴状遺構・集石遺構が検出され、主として前期前葉の上川名Ⅱ式の土器群が出土した(県教委 2015)。

西石山原遺跡では、平成 22･23 年度に県教委による調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴建物跡などが検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式、後期後葉～末葉の大木 10 式の土器群が出土している(県教委 2012)。

南山神Ｂ遺跡では、平成 23･24 年度調査で中期後半の遺物包含層・柱穴・土坑が検出され、中期後半の大木 9 式の土器群が出土した(県教委 2015)。

谷原遺跡では、平成 22･24 年度調査で中期末～後期前葉の掘立柱建物で構成される南北 40m・東西 35m の環状集落、その周囲で同時期の土坑・土器埋設遺構・遺物包含層などを検出し、後期末の大木 10 式、後期初頭～前葉の綱取Ⅰ・Ⅱ式の土器群が出土した(町教委 2016a・b)。

昭和 53 年に調査を実施した**中島貝塚**では、後期～晩期の縄文土器・石器とともに貝殻・魚骨・獣骨が数多く出土した(山元町誌編纂委員会 1986)。**涌沢遺跡**では、平成 24 年度調査で後・晩期の遺物包含層が検出され、後期後半の瘤付土器・晩期前葉の大洞 B～BC 式の土器群が出土した(県教委 2015)。**中筋遺跡**では、平成 24 年度調査で晩期の遺物包含層を検出し、晩期前葉～末の大洞 BC 式・大洞 C2 式・大洞 A～A´式の土器群や後期前葉～後葉の土器も出土している(町教委 2015b)。



西石山原遺跡　縄文時代の竪穴住居跡（縄文時代中期末）

谷原遺跡２次調査で発見した縄文時代の環状集落（北から）

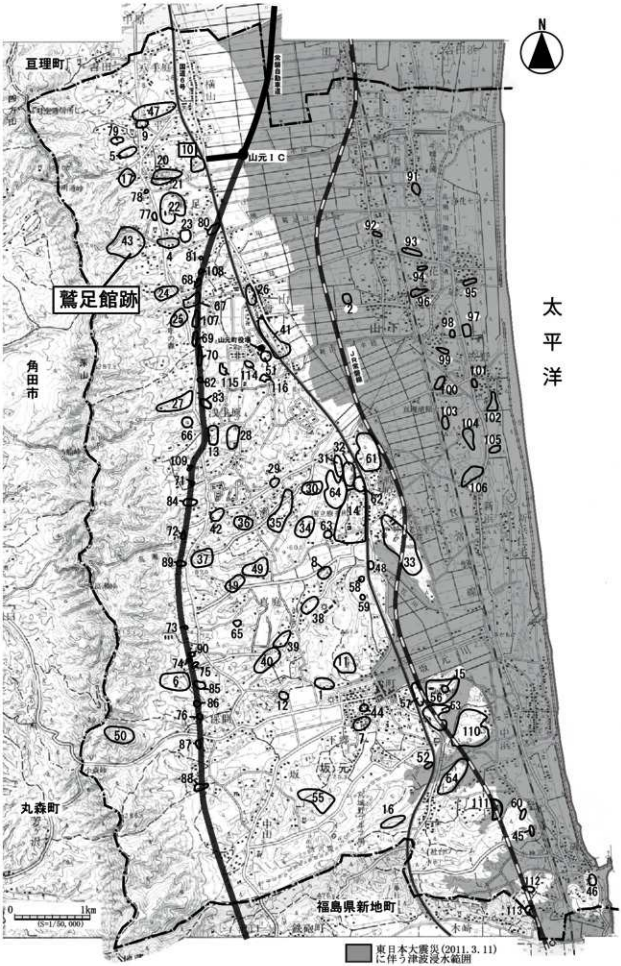
【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡(80)、狐塚遺跡(56)、館の内遺跡(9)、北経塚遺跡(10)、谷原遺跡(67)、日向遺跡(68)などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度調査で水田跡や遺物包含層などを検出し、中期前葉の鰻沼式～中期中葉の枡形囲式を中心とする土器群や石包丁・板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認している(町教委 2015b、山田 2015a)。

狐塚遺跡では、平成 5 年度調査で溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土したほか、平成 25 年度調査では遺物包含層から同時期の土器、石包丁などが出土している(町教委 1995、県教委 2016 ほか)。

中筋遺跡　弥生時代の水田跡（弥生時代中期中葉）



第３図　鷲足館跡の位置と山元町内の遺跡分布

第１表　山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後
2	新田遺跡	散布地	古墳後・古代
3	欠番	—	—
4	中鳥貝塚	貝塚	縄文中～晩
5	味曽野横穴墓群	横穴墓	古墳後
6	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩
7	蕨首城跡	城館	中世・近世
8	上台遺跡	散布地	弥生・平安
9	館の内遺跡	集落	古代
10	北経塚遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前、古墳前・中中世
11	愛宕山館跡	城館	中世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世
14	合戦原遺跡	集落・横穴墓 須恵器窯跡・製鉄	古墳中・後、古代
15	狐塚古墳群	古墳	古墳後
16	一の沢遺跡	散布地	弥生
17	清水遺跡	散布地	弥生
18	欠番	—	—
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳
20	小平館跡	城館・散布地	古墳前・古代・中世
21	舘横穴墓群	横穴墓	古墳後
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後
23	中道遺跡	散布地	縄文・古墳後
24	石堂遺跡	散布地	古代
25	山寺館跡	城館	中世
26	作田山館跡	城館	中世
27	入山遺跡	散布地	縄文・古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前
29	宮後遺跡	散布地	古代
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代
31	舘下窯跡	須恵器窯	古代
32	中鳥館跡	城館	中世
33	戸花山遺跡	古墳・須恵器窯・ 製鉄・散布地	縄文・古墳・古代
34	北名生東窯跡	須恵器窯	古代
35	室原遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
38	原遺跡	散布地	古墳
39	浅生遺跡	散布地	古代
40	南権現遺跡	散布地	縄文早・前、古墳
41	山下館跡	城館	中世
42	石山原遺跡	散布地	縄文
43	**鷲足館跡**	**城館**	**中世**
44	舘下遺跡	散布地	弥生
45	大堤小塚十三塚	塚	近世
46	唐船番所跡	番所	近世
47	大平館跡	集落・城館	平安・中世
48	貝吹城跡	城館	中世
49	真庭館跡	城館	中世
50	新城山古館跡	城館	中世
51	日向窯跡	窯跡	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後
53	熊の作遺跡	集落	古墳後・古代
54	駒場原遺跡	散布地	古代
55	川内遺跡	製鉄	古代
56	狐塚遺跡	集落・生産	古墳中～古代
57	向山遺跡	集落・生産	古墳・古代
58	郡月崎塚	塚	中世・近世
59	北越塚	塚	中世、近世
60	東作経塚	経塚	中世
61	合戦原B遺跡	製鉄	古代
62	合戦原C遺跡	古墳	古墳中
63	北名生東B窯跡	窯跡	古代
64	大久保B遺跡	散布地	古代
65	北権現遺跡	製鉄	古代
66	山王遺跡	製鉄	古代？
67	谷原遺跡	集落	縄文後・弥生～中世
68	日向遺跡	集落	縄文後・古墳後～中世
69	石場遺跡	集落	縄文・古墳前 平安・近世
70	的場遺跡	集落	縄文前・古墳前 平安・近世
71	上宮前遺跡	散布地	平安・中世
72	北山神遺跡	散布地	縄文
73	新田B遺跡	散布地	古代
74	影倉B遺跡	散布地	縄文
75	影倉C遺跡	散布地	古代
76	荷駄場遺跡	散布地	縄文
77	北遺跡	散布地	古代
78	北ノ入遺跡	散布地	古代
79	味曽野遺跡	散布地	古代
80	中筋遺跡	水田・包含層 墓域？	縄文晩・弥生中 古墳前
81	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文・近世
83	内手遺跡	製鉄・生産	平安
84	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安
85	影倉D遺跡	製鉄	古代
86	荷駄場B遺跡	散布地	古代
87	上小山遺跡	散布地	古代・中世
88	法羅遺跡	散布地	縄文
89	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代
90	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世
91	北泥沼遺跡	散布地	古代
92	泥沼遺跡	散布地	古代
93	畑合遺跡	散布地	古代
94	北頭無遺跡	散布地	古代
95	浜遺跡	散布地	古代
96	頭無遺跡	散布地	古代
97	花笠遺跡	散布地	古代
98	西北谷地A遺跡	散布地	古代
99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
100	西須賀遺跡	散布地	古代
101	笠野A遺跡	散布地	古代
102	笠野B遺跡	散布地	古代
103	北中須賀遺跡	散布地	古代
104	狐須賀遺跡	散布地	古代
105	笠浜遺跡	散布地	古代
106	新浜遺跡	散布地	古代
107	涌沢遺跡	集落	縄文・古代～近世
108	日向北遺跡	集落	古墳後・中世～近世
109	上宮前北遺跡	集落	古代
110	大塚遺跡	製鉄	古代
111	新中条窪遺跡	集落・須恵器窯 製鉄	古代
112	雷神遺跡	集落・生産	古代
113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
114	作田山遺跡	製鉄	古代
115	内手B遺跡	製鉄・須恵器窯	古代
116	作田山B遺跡	生産	古代

このほか、北経塚遺跡・館の内遺跡・谷原遺跡・日向遺跡などにおいて、遺構は確認されていないものの、弥生時代の遺物が出土している。**北経塚遺跡**では、平成21・23年度調査で中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した(町教委 2010・2013)。**館の内遺跡**では、平成13年度調査で中期後半の十三塚式の土器が出土した(県教委 2002)。**谷原遺跡**では、平成22・24年度調査で中期前半～中期中葉の土器が出土した(町教委 2016a・b)。**日向遺跡**では、平成23年度調査で中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した(町教委 2015a)。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(80)・石垣遺跡(69)・的場遺跡(70)・犬塚遺跡(110)、前期～中期の北経塚遺跡(10)、中期～終末期の合戦原遺跡(14)、後期～終末期の狐塚遺跡(56)・日向北遺跡(108)・日向遺跡(68)・谷原遺跡(67)・熊の作遺跡(53)・井戸沢横穴墓群(1)などがある。

中筋遺跡では、平成24年度調査で前期の土坑墓群を検出した(町教委 2015b)。**石垣遺跡**では、平成23年度調査で前期の竪穴建物跡を検出した(町教委 2014b)。**的場遺跡**では、平成23年度調査で前期の竪穴建物跡・土坑・溝跡を検出した(町教委 2014a)。**犬塚遺跡**では、平成27年度調査で前期の方形周溝を伴う墳丘を確認している(宮城県考古学会 2015)。**北経塚遺跡**では、平成21・23年度調査で前期の竪穴建物跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡を検出した(町教委 2010・2013)。

合戦原遺跡では、平成2年度調査において中期末頃の大型の竪穴建物跡が検出された(県教委 1991)。また、平成8・9年に実施された測量調査で、前方後円墳を含む古墳群が確認されている(青山ほか 2000)。さらに、平成26年度から28年度にかけて震災復興に伴い実施した大規模調査において、終末期の横穴墓群や竪穴建物跡を確認しており、特に横穴墓群の調査では、玄室奥壁に線刻画が描かれた横穴墓を発見したほか、副葬品として土師器・須恵器・玉類、それに直刀・蕨手刀・鉄鏃・馬具などの多くの金属製品が出土し、注目を集めている(山田 2015b・2017、宮城県考古学会 2015)。

中筋遺跡　古墳時代前期の土坑墓（平成24年度調査）

北経塚遺跡　古墳時代中期の円墳周溝跡（平成23年度調査）

合戦原遺跡の横穴墓群（平成26～28年度調査）

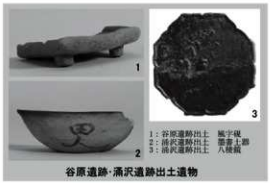
狐塚遺跡では、平成4・5年度調査で後期の竪穴建物跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された(県教委 1993、町教委 1995)。**日向北遺跡**では、平成24年度調査で終末期前後の竪穴建物跡を検出した(町教委 2014c)。**日向遺跡**では、平成23・28年度調査で後期の竪穴建物跡、終末期の遺物包含層を検出した(町教委 2015a・2017b)。**谷原遺跡**では、平成22・24年度調査で終末期頃の竪穴建物跡を検出した(町教委 2016b)。**熊の作遺跡**では、平成25・26年度調査で後期～終末期の竪穴建物跡・掘立柱建物跡が検出された(県教委 2016)。昭和44年に調査が行われた**井戸沢横穴墓群**は、確認された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、それらとの関連性が指摘されている(山元町誌編纂委員会 1971)。

【奈良・平安時代の遺跡】

熊の作遺跡(53)、谷原遺跡(67)、涌沢遺跡(107)、館の内遺跡(9)、日向遺跡(68)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、雷神遺跡(112)、山ノ上遺跡(113)、犬塚遺跡(110)、新中永窪遺跡(111)、北名生東窯跡(34)、合戦原遺跡(14)、狐塚遺跡(56)、内手遺跡(83)、上宮前北遺跡(109)、向山遺跡(57)、川内遺跡 (55)、内手Ｂ遺跡(115)、作田山遺跡(114)などがある。

熊の作遺跡では、平成 25･26 年度調査で奈良～平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、四脚門跡が検出され、「坂本願」・「大領」・「子弟」などの墨書土器や風字硯・石帯・木簡・木製品が出土するなど大きな成果が得られており、陸奥国亘理郡に関連する役所跡と推定されている(県教委 2016)。**谷原遺跡**では、平成 22･24 年度調査で 7 世紀末～8 世紀前葉、8 世紀後半～9 世紀前葉、9 世紀後半の竪穴建物跡などを検出し、風字硯・円面硯、墨書土器などが出土した(町教委 2016b)。**涌沢遺跡**では、平成 24 年度調査で 8 世紀末～10 世紀後半の竪穴建物跡・竪穴状遺構・土器廃棄土坑や 8 世紀末～9 世紀初頭の鍛冶関連遺構などが検出され、「田人」・「十万」・「千万」の墨書土器や 10 世紀後半の八稜鏡などが出土した(宮城県考古学会 2012、県教委 2015)。**館の内遺跡**では、平成 13 年度調査で規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴建物跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している(県教委 2002)。**日向遺跡**では、平成 23･28 年度調査で 8 世紀後半～10 世紀前半の集落跡を検出した(町教委 2015a･2017b)。**石垣遺跡**では、平成 23 年度調査で 9 世紀後半の竪穴建物跡・竪穴状遺構・土器廃棄土坑を検出し、土器廃棄土坑からは墨書土器(「田」・「人」)が出土した(町教委 2014b)。**的場遺跡**では、平成 23･25 年度調査で 9 世紀後半の竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構を検出した(町教委 2014a)。**雷神・山ノ上遺跡**では、平成 25 年度調査で奈良時代頃の竪穴建物跡などが検出されている(県教委 2016)。

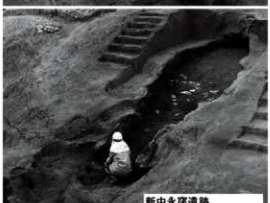
犬塚遺跡では、平成 25 年度から 27 年度にかけて県教委と町教委が実施した調査において、奈良時代前半を中心とする竪穴建物跡・木炭窯跡・横口付木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された(初鹿野 2015a･b、宮城県考古学会 2015、県教委 2016)。**新中永窪遺跡**では、平成 25･26 年度調査で奈良～平安時代初期の竪穴建物跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された(県教委 2016)。**北名生東窯跡**では、昭和 37･38･52 年度に須恵器窯跡の調査が行われ、8 世紀後半～9 世紀初頭の須恵器が出土した(山元町誌編纂委員会 1971)。**合戦原遺跡**では、平成 2 年度調査



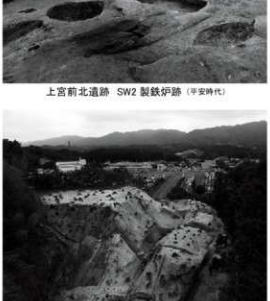
谷原遺跡・涌沢遺跡出土遺物

熊の作遺跡出土 墨書土器・木簡

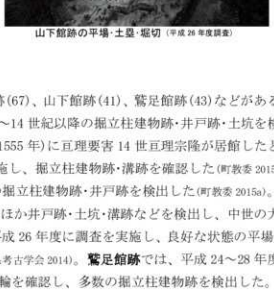
新中永窪遺跡
横口付木炭窯跡
（7 世紀後半～ 8 世紀前葉）


新中永窪遺跡
須恵器窯跡（8 世紀中葉）

で奈良～平安時代の須恵器窯跡を(県教委 1991)、平成 26・27 年度調査で製鉄炉跡・木炭窯跡・焼成土坑を確認している(山田 2015b、宮城県考古学会 2015)。**狐塚遺跡**では、平成 4・5 年度調査で平安時代の竪穴建物跡・木炭窯跡などが検出された(県教委 1993、町教委 1995)。**内手遺跡**では、平成 23 年度調査で 9 世紀代の地下式木炭窯跡 7 基・横口付木炭窯跡 1 基が検出されている(初鹿野 2013、県教委 2015)。**上宮前北遺跡**では、平成 24 年度調査で 9 世紀の製鉄炉跡 4 基が検出されている(初鹿野 2013、県教委 2015)。**向山遺跡**では、平成 25 年度調査で平安時代の竪穴建物跡や鍛冶工房が検出されている(県教委 2016)。**向山遺跡**では、平成 25 年度調査で平安時代の竪穴建物跡や鍛冶工房が検出されている(県教委 2016)。**川内遺跡**では、平成 28 年度調査で古代の製鉄遺構 4 基・木炭窯跡 5 基が検出されている(町教委 2018)。**内手 B 遺跡**では、平成 26 年度試掘調査で奈良時代の須恵器窯跡を、**作田山遺跡**では、平成 25 年度試掘調査で古代の製鉄関連遺構を検出している。



上宮前北遺跡　SW2 製鉄炉跡（平安時代）



山下館跡の平場・土塁・堀切（平成 26 年度調査）

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、小平館跡(20)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、山下館跡(41)、鷲足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23・28 年度調査で 13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑を検出した(町教委 2010・2013・2017a)。**小平館跡**は、天文年間(1532～1555 年)に亘理要害 14 世亘理宗隆が居館したとされている館跡で(紫桃 1974)、平成 24・25・27 年度に調査を実施し、掘立柱建物跡・溝跡を確認した(町教委 2015c)。**日向遺跡**では、平成 23 年度調査で 13 世紀後半～16 世紀の掘立柱建物跡・井戸跡を検出した(町教委 2015a)。**谷原遺跡**では、平成 22・24 年度調査で多数の掘立柱建物跡のほか井戸跡・土坑・溝跡などを検出し、中世の大規模な屋敷跡の存在を確認した(町教委 2016b)。**山下館跡**では平成 26 年度に調査を実施し、良好な状態の平場・土塁・堀切を確認し、掘立柱建物跡や柱穴列を検出した(宮城県考古学会 2014)。**鷲足館跡**では、平成 24～28 年度に断続的に調査を行っており、腰郭と柱穴列で区画された曲輪を確認し、多数の掘立柱建物跡を検出した。

【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王 B 遺跡(82)、蓑首城跡(7)などがある。

石垣遺跡では、平成 23 年度調査で掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡を検出した(町教委 2014b)。**的場遺跡**では、平成 23・25 年度調査で 17～19 世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡を検出した(町教委 2014a)。**山王 B 遺跡**では、平成 22 年度調査で掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された(県教委 2012)。**蓑首城跡**は、戦国時代末期に築城され、元和 2(1616)年以降、大條氏が居城した城で、平成 25 年度に二ノ丸跡の調査を実施し、掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡などを検出した(宮城県考古学会 2013)。

蓑首城跡　二ノ丸跡の遺構（平成 25 年度調査）

第３節　鷲足館跡の概要

１　鷲足館跡の歴史について

鷲足館跡は中世の城館として登録・認識されている遺跡であるが、中世の古文書からその歴史を確認できる例はなく、江戸時代前期の延宝年間（1673～1681）に編纂された『仙台領古城書上』、享保 13 年（1728）編纂の『仙台領古城書立之覚』に「鷲足城」として、その存在が記載されている程度である。これらの文献によれば、鷲足館跡は鷲足村に所在する山城で、規模が東西８間、南北 30 間の 240 坪、城主の詳細は不明とされている。この他、鷲足館跡に関する情報が記載されているものには、『山元町誌』、『史料　仙台領内古城・館』、『日本城郭体系』などが挙げられ、城主として鷲足清久や千石勘三郎といった名前が記載されているが、その記述はいずれも口伝や出典不明の内容が多い（第２表）。

以上のとおり、現状では、鷲足館跡は中世の城館として認識されているものの、文献上からはその年代・城主の詳細を探ることは難しいと言わざるを得ない。

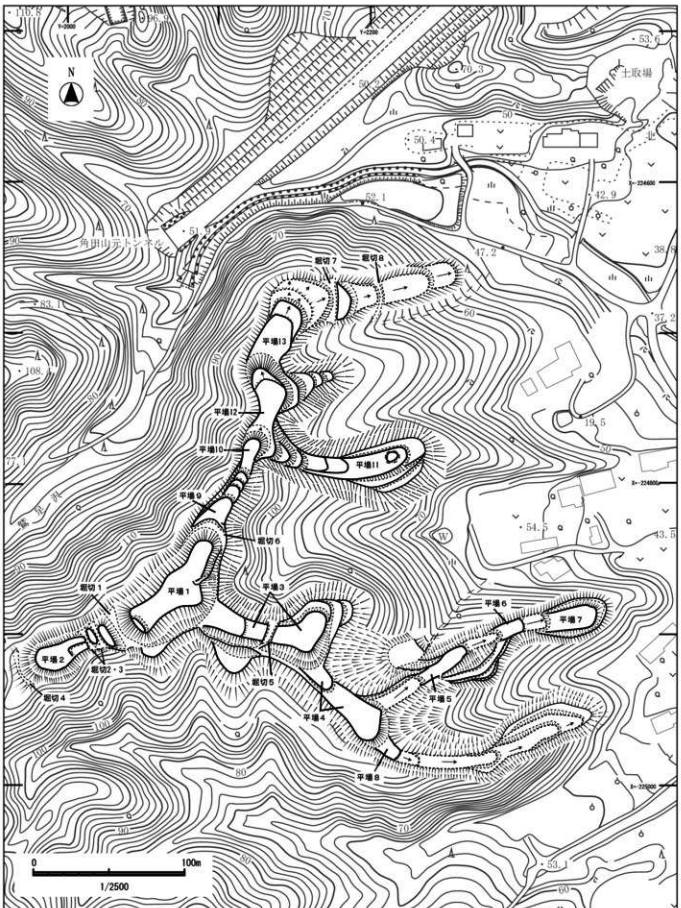
第２表　鷲足館跡に関する文献及び記載内容一覧

文献名		鷲足館跡に関する記載内容
『仙台領古城書上』 （延宝年間/1673～1681 年）		鷲足村　山　一　鷲足城　同　八間　三十間　野武士共取立住
『仙台領古城書立之覚』 （享保 13 年/1728 年）		鷲足村　山　一　鷲足城　東西八間　南北三十間　二百四十坪　右城主無之候戦国之時分指引場野武士取立候故否不分明二御座候
『山元町誌』 （昭和 49 年 /1971 年）	196 頁 第１章行政 第７節行政区	鷲足屋敷は、天正年間（1573～1592）鷲足清久という野武士の館跡である。清久は天正十八年（1590）五月、豆理館主重宗、相馬盛胤（相馬中村城主）と戦った時、重宗に従軍、中村小豆畠で戦死した。
	577 頁 第３章名所・旧跡と記念碑 第１節名所・旧跡	鷲足の西方大館囲にあって、封内風土記に「東西四十五間（八メートル）南北二十間（三六メートル）千石勘三郎の居館なり」とあるが年代は不明である。ほかに仙台叢書によれば、今に之個ある鷲足屋敷は、天正年間（1573～1592）鷲足清久という野武士の館跡といわれる。
『史料　仙台領内古城・館』第４巻 （昭和 46 年/1974 年） 612～613 頁		鷲足城と呼ばれる館山は、高さ約 110 米、連山の中の一つの峻峯の上にその跡が認められる。（中略）頂上部には東西 30 米、南北 50 米ほどの三角形に近い削平地があり（中略）北面には二段の段を、そして北面登り口には１条の空壕を置き、南、東、西の三面は目もくらむ絶壁となり、無類の要害を誇る。（中略）常時軍兵の駐屯したところは考えられず、むしろ、物見台、ノロシ台として重きをなした所と推定される。
『日本城郭体系』第３巻 （昭和 56 年/1981 年） 408 頁　その他の城郭一覧		山間部の小高い丘陵上にあり、頂部は狭い平場で、西面に段築と空堀がある。南と北は自然の急崖となる。居住性に乏しい城跡。戦国の時分、野武士が取り立てたといわれるが明らかではなく、千石勘三郎の居城ともいう。

２　鷲足館跡の構造

鷲足館跡として登録されている遺跡範囲内において、発掘調査前の現地踏査により目視で確認できる遺構と考えられる痕跡には、平場・土塁・堀切等がある。数回にわたる現地踏査の結果をもとに作成した館跡の略測図が第４図である。以下、第４図をもとに、現況から推察される鷲足館跡の構造の概要について述べる。

鷲足館跡は、阿武隈山地東麓に位置する標高 50～130m ほどの丘陵地に立地し、標高 50m 以下の丘陵裾部東方には平坦な地形が広がる。遺跡範囲において最も標高の高い地点は、遺跡西端の尾根頂部である。西端付近の標高は約 130m で、その地点に東西 70m・南北 10～30m ほどの「平場１」があり、そこから西・北東・南東それぞれに枝分かれして延びる尾根上に複数の平場が存在する。「平場１」は本館跡において最も標高の高い地点に位置し、かつ、最もその占有面積が広い平場であることから、館の主郭となる可能性が高い。この平場１上の西端には高さ 4m ほどの土塁状の高まり「土塁１」があり、さらにその西側には切岸を思わせる急斜面と堀切状の痕跡「堀切１」が認められる（第５図）。この土塁１上部と堀切１底面の高低差は現況で 13m 程度あり、土塁１から堀切１側に下る際は、急斜面の雑木を掴みながら下らなければ滑落する恐れがあるほ


N
土取場
堀切7
堀切8
平場13
平場12
平場10
平場11
平場9
堀切6
平場1
平場3
堀切1
平場2
堀切2・3
堀切4
堀切5
平場4
平場6
平場7
平場5
平場8
0
100m
1/2500

第４図　鷲足館跡　略測図

1. 鷲足館跡 遠景（東から）

2. 鷲足館跡 平場１ 現況（北東から）

3. 鷲足館跡 平場１西端 土塁１ 現況（北東から）

4. 鷲足館跡 平場１西側急斜面 現況（南から）

5. 鷲足館跡 堀切１ 現況（南東から）

第５図　鷲足館跡の現況

どである。堀切１の西側には土塁状の高まり・堀切状の痕跡「堀切２・３」があり、そのさらに西側に、東西35m・南北15mの東西に細長い「平場２」が所在する。この「平場２」の西側には切岸状の急斜面があり、その下に堀切状の痕跡「堀切４」が認められる。堀切４以西については、館の構造と推定される地形が確認されないことから、「平場２」が本館跡の西端末端部と推定される。平場１南東の尾根には、標高120m前後の地点に東西85m・南北12～27mの東西に細長い「平場３」、そのさらに南東の標高105m前後の地点に東西60m・南北14～22mの「平場４」が所在する。「平場３」は本館跡の中で２番目に広い平場であり、主郭の可能性がある「平場１」に隣接していることから、館の副郭に位置付けられる可能性がある。平場４東半の標高約100mの地点から尾根が北東・南東の２方向に分岐し、それぞれの尾根上に細長い平場・緩斜面が数段続き、尾根東端の丘陵裾部に至る。このうち、平場４北東の尾根に位置する「平場５」と「平場６」の南斜面には、腰曲輪を思わせる段状の地形が数段残存している。平場１北東の尾根には、まず、標高120mの地点に南北17m・東西13mほどの「平場９」が所在し、平場１と平場９の間には堀切状の痕跡「堀切６」がある。平場９のさらに北側は小平場が３段続き、標高112mの付近の南北20m・東西10mの細長い「平場10」へ至る。平場10からは尾根が東と北に分岐し、東側の尾根には数段の小平場の後、標高90m前後の地点に東西40m以上・南北14mほどの東西に細長い「平場11」がある。平場11の東端には塚状の高まりがあり、また南北の斜面には１段ないし２段の段状の地形が認められる。平場10北側に延びる尾根上には、「平場12」・「平場13」、堀切状の痕跡「堀切７・８」などがあり、これらが尾根上の小平場や緩斜面と組み合わさり丘陵裾部に至る。

鷲足館跡範囲内の地形全般に言えることは、尾根上の平場前後に位置する斜面は、いずれも急斜面であるということである。現地踏査を行った際の印象としては、斜面から直接平場に到達することは非常に困難で、尾根伝いでなければ平場間の移動は難しかった。また、尾根伝いの移動であっても、それぞれの平場間の高低差が大きくその移動は容易ではなかった。平場周辺の斜面がすべて切岸であったか否かは現地踏査のみで断言はできないが、少なくとも尾根谷側の斜面の多くは自然地形であると考えられ、また、尾根上の平場接続部の斜面は切岸として造成された斜面かもしれない。なお、現地踏査の際は、平場１の北東に延びる尾根（平場９～13）のほうが比較的高低差が少なく登りやすい、逆に南東の尾根（平場３～８）は非常に険しい斜面が続き、接続する平場間の高低差も大きくその登城は困難な印象を受けた。あくまでも推察の域ではあるが、常時の登城ルートは北尾根にあり、南東尾根の尾根に防御性の高い構造を備えた山城であったと考えられる。

以上が現地調査（目視）により確認できた鷲足館跡の遺構・地形の特徴である。鷲足館跡の構造的特徴は県内の中世城館と類似することから、中世を中心とした山城であったと推定される。また、現地踏査の結果から、本館跡は、丘陵の尾根及び急斜面の自然地形を最大限利用して造成された防御性の高い山城と言える。加えて、丘陵頂部から町域東辺の太平洋、南北に広がる仙台平野を一望できる環境にもあり、防御・眺望の面で優れた山城であったと考えられる（第６図）。

第６図　鷲足館跡からの眺望

第４節　発掘調査に至る経緯

平成 24 年度下半期、宮城県亘理郡山元町鷲足字大舘 25-1 他と埋蔵文化財のかかわりについて、深山総合開発株式会社（以下、事業主）から山元町教育委員会（以下、町教委）に遺跡照会がなされた。その内容は、鷲足館跡一帯の山林の土砂を採取するというもので、この計画は平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災（以下、震災）に伴う復興事業に関連する事業として位置付けられていた。

町教委では、この事業予定範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地である「鷲足館跡」の面積の約半分を占める広大な計画であったことから、事業主へ対し事前の協議を行う旨の回答を行った。平成 25 年１月９日、「土石採取事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が事業主から町教委に提出され、翌日、町教委では意見書を付し、宮城県教育庁文化財保護課（以下、県教委）に協議書を進達した。その後、県教委と町教委両者で遺跡の取り扱いに関する協議を行った結果、鷲足館跡についてはこれまで本格的な調査が実施されておらず、その詳細が把握されていなかったことから、まず、その状況を把握するため現地踏査を行った上で遺跡の取り扱いを決定することとなった。

これを受け、平成 25 年１月 31 日、県教委・町教委により現地確認を実施したところ、鷲足館跡の範囲内には中世の山城と考えられる平場・堀切等の遺構が良好な状態で残存していることが明らかとなり、事業の実施により遺跡へ与える影響が高いと判断された。平成 25 年２月６日、現地踏査の内容を踏まえ、事業主と再度、事業計画の変更協議等を行った結果、土地買収等の関係から事業自体の中止は避けられない結論となったものの、事業主から文化財保護の趣旨を理解いただき、遺跡の本体をできるだけ避け土砂採取を行う計画へ変更していただくことになった。しかしながら、この計画変更によっても遺跡範囲の掘削が避けられない箇所があったことから、その範囲については、事前に発掘調査を実施し記録保存を行う対応とした。

以上の協議を経て、平成 25 年２月に鷲足館跡の１次調査（A 区）の本発掘調査を実施することとなったわけであるが、その後も本事業の見直し等に伴い、その都度、県教委・町教委・事業主による協議・調整が図られ、結果としては平成 24 年度から平成 28 年度にかけて５度にわたる発掘調査が実施された（第７図）。その事務処理状況等については第３表のとおりである。

第３表　鷲足館跡 1～5 次調査に係る事務処理状況

	原因	協議書提出・回答日	法 93 条発掘届提出・回答日	本調査期間・調査面積	遺失物法等の関する届出
１次調査（A 区）	土砂採取用通路造成	H25.1.10 提出［町→県］（山教委発第 1601 号）→回答：H25.2.8（県教委/文第 3199 号）	H25.2.28 提出［町→県］（山教委発第 1884 号）→回答：H25.3.13（県教委/文第 3543 号）	【１次調査（A 区）】期間：H25.2.22～3.8　調査日数 11 日　面積：770 ㎡	【埋蔵物発見届】H25.3.8 提出（山教委発第 1883 号）【文化財認定】H25.3.25 提出（山教委初第 1950 号）
２次調査（B 区）				【２次調査（B 区）】期間：H25.5.22～6.10　調査日数 14 日　面積：960 ㎡	出土遺物なし
３次調査（C 区）	土砂採取用通路拡大	H25.6.24 提出［町→県］（山教委発第 519 号）→回答：H 25.7.3（県教委/文第 880 号）	H25.7.10 提出［町→県］（山教委発第 613 号）→回答：H25.7.19（県教委/文第 1017 号）	【３次調査（C 区）】期間：H26.1.6～3.12　調査日数 33 日　面積：4230 ㎡	【埋蔵物発見届】H27.1.19 提出（山教委発第 1622 号）【文化財認定】H27.2.20 提出（山教委発第 1623 号）
４次調査（D 区）	土砂採取範囲拡大	H26.5.30 提出［町→県］（山教委発第 375 号）→回答：H 26.6.6（県教委/文第 659 号）	H26.8.27 提出［町→県］（山教委発第 898 号）→回答：H26.9.26（県教委/文第 1649 号）	【４次調査（D 区）】期間：H26.9.8～10.16　H27.1.13～1.16　調査日数 27 日　面積：3050 ㎡	
５次調査（F 区）	土砂採取範囲拡大	H28.11.30 提出［町→県］（山教委発第 1312 号）→回答：H28.12.14（県教委/文第 2388 号）	H28.12.19 提出［町→県］（山教委発第 1411 号）→回答：H28.12.28（県教委/文第 2483 号）	【５次調査（E 区）】期間：H29.2.13～3.10　調査日数 19 日　面積：1220 ㎡	出土遺物なし

第５節　発掘調査の経過と方法

１　現地調査の経過

鷲足館跡（1～5次調査）の本発掘調査は、町教委が主体となり、平成24年度から平成28年度にかけて実施した。それぞれの本発掘調査の期間・調査日数・調査面積等は第3表、調査体制は第4表、調査箇所は第7図のとおりで、1～5次調査の総調査面積は10,230㎡、のべ調査日数は104日である。

（１）事前準備

調査に先立ち、事業主から町教委宛てに調査依頼文書が提出され、これに対し、町教委から発掘調査経費見積り額の提示とともに調査実施の回答を行った。その後、事業主から経費負担承諾の文書が提出され、これを受けて現地調査業務に係る委託契約を締結し、各種事前準備（物品手配・作業員雇用・各種契約事務等の準備）に着手した。なお、発掘調査経費節減のため、現場事務所、駐車場、仮設トイレ、バックホウをはじめとする各種重機類については、オペレーターとともに事業主から提供を受けることとした。

（２）現地調査の経過

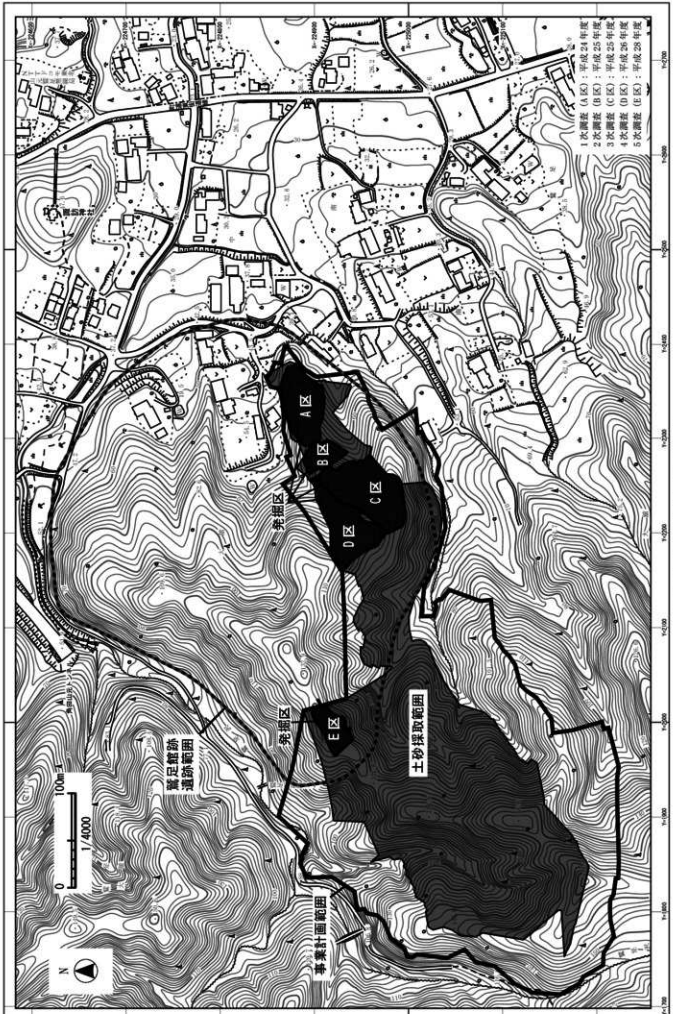
調査はまず、対象地区の立木伐採から着手し、その後、バックホウ及び人力による表土除去を行った。表土除去・抜根は、バックホウのアームが届く範囲は重機による掘削を行ったが、斜面等の急傾斜地については人力により掘削を行った。その後、測量のための基準点設置を調査員が行い、調査員の指揮のもと、作業員の人力による遺構の検出・掘削・精査を開始した。遺構の精査完了後は、俯瞰システムによる発掘区の全景撮影・その他の予備調査を行い、現場資材等を撤収し調査を完了した。事前の取り決めに従い、現場の埋戻しを行わず、発掘区を事業主に引き渡した。発掘調査完了後、遺物が出土した発掘区については、その都度遺失物法に基づく手続き、出土遺物の文化財認定に係る一連の手続きを実施した。

（３）略測図の作成

現地発掘調査実施の際、今後のために鷲足館跡全体の略測図（第4図）の作成も合わせて行った。作業にあたっては、地権者の承諾を得て最低限の立木を伐採しながら測量基準点を各所に設置し、その基準点を起点にし、携帯型レーザー距離計を用い略測図を作成した。

第４表　鷲足館跡 調査体制（現場・整理）

年度	調査	教育委員会生涯学習課の体制			現場作業員・整理作業員（臨時職員）
		事務局	現地調査・整理担当		
H24	1次	教育長　森　憲一 課　長　曾藤三郎 班　長　武田賢一	主　事　山田陸博 主　事　丹野修太（庁舎付職員） 遺跡調査員　藤田　祐（臨時職員・現場） 遺跡調査員　佐伯奈弓（臨時職員・整理）		（現場）飯川幸男、石井進、伊藤清、伊藤成夫、及川博子、白鳥浩二、深澤久美、増川悠記、矢吹共子、遊佐豊美、横山真、渡部修、渡邊洋子
H25	2次	教育長　森　憲一 課　長　曾藤三郎 班　長　阿部正憲	主　事　山田陸博 遺跡調査員　藤田　祐（臨時職員・現場） 遺跡調査員　佐伯奈弓（臨時職員・整理）		（現場）相原一智、飯川幸男、石井進、伊藤清、伊藤成夫、佐藤明、白鳥浩二、立谷重晴、増川悠記、松本昭彦、秋井諒人、森忠男、遊佐豊美、横山真、渡部修 （整理）梅村眞智子、及川博子、斉藤則彦、高橋みゆき、萩本厚子、橋元和子、深澤久美、三浦則子、水本恵子、矢吹共子、渡邊洋子
	3次	教育長　森　憲一 課　長　曾藤三郎 班　長　阿部正憲	主　事　山田陸博 遺跡調査員　藤田　祐（臨時職員・現場） 遺跡調査員　佐伯奈弓（臨時職員・整理）		（現場）相原一智、飯川幸男、石井進、伊藤清、伊藤成夫、及川博子、斉藤健二、立谷重晴、南條義博、矢吹共子、遊佐豊美、渡部修、渡邊洋子 （整理）梅村眞智子、及川博子、斉藤則彦、高橋みゆき、萩本厚子、橋元和子、深澤久美、三浦則子、水本恵子、矢吹共子、渡邊洋子
H26	4次	教育長　森　憲一 課　長　曾藤三郎 班　長　阿部正憲	主　事　山田陸博 遺跡調査員　佐伯奈弓（臨時職員・整理）		（現場）飯川幸男、石井進、伊藤清、斉藤健二、佐藤明、白鳥浩二、高橋美知雄、立谷重晴、玉田眞智子、千葉美恵子、南條義博、西山ゆり子、増川悠記、松田正雄、松本昭彦、矢吹共子、森忠男、遊佐豊美、横山真、渡部修、渡邊洋子 （整理）梅村眞智子、斉藤則彦、萩本厚子、橋元和子、矢吹共子、渡邊洋子
H28	5次	教育長　森　憲一（～H28.10） 菊池卓郎（H28.10～） 課　長　曾藤三郎 班　長　阿部正憲	主　事　山田陸博 遺跡調査員　佐伯奈弓（臨時職員・整理）		（現場）伊藤丈之、伊藤成夫、雲野淳、斉藤健二、佐藤弘次、佐藤光義、高橋美知雄、立谷重晴、増川悠記、松田正雄、三坂泰雄、三島常康、森忠男、門馬祐作、遊佐豊美 （整理）渡邊洋子
H29	—	教育長　菊池卓郎 課　長　佐山学 班　長　阿部正憲	主　査　山田陸博 遺跡調査員　佐伯奈弓（臨時職員・整理）		（整理）橋元和子、矢吹共子、渡邊洋子



第７図　鷲足館跡　調査箇所

２　整理・報告書作成作業の経過

鷲足館跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。

今回の鷲足館跡の調査は、複数年にわたる調査であったため、各年度の調査完了後、出土遺物や各種記録類の基礎整理は着手している状況であった。事業主との事前協議の結果、発掘調査報告書の刊行は、平成 29 年度に行うことに決定していたことから、本格的な整理作業・発掘調査報告書刊行は平成 29 年度に行った。平成 29 年度の整理・報告書作成に係る業務は、平成 28 年 12 月 27 日付で事業主と委託契約を締結した上で、各種作業を進めた。それぞれの年度で行った具体的な作業内容は以下のとおりである。

【平成 24 年度の作業内容】
- 1 次調査の記録写真類の整理
- 1 次調査の平面図、断面図の修正

【平成 25 年度の作業内容】
- 2～3 次調査の記録写真類の整理
- 2～3 次調査の平面図、断面図の修正
- 1～3 次調査の平面図、断面図トレース
- 1 次調査出土遺物の整理（洗浄・接合・注記・復元・抽出・実測図作成）

【平成 26 年度の作業内容】
- 4 次調査の記録写真類の整理
- 4 次調査の平面図、断面図の修正・トレース
- 3～4 次調査出土遺物の整理（洗浄・接合・注記・復元）

【平成 27 年度の作業内容】
- 1～4 次調査の平面図合成作業、等高線図作成

【平成 28 年度の作業内容】
- 5 次調査の記録写真類の整理
- 5 次調査の平面図、断面図の修正・トレース

【平成 29 年度の作業内容】
- 3～4 次調査の出土遺物の整理作業（実測図作成）
- 1～5 次調査の出土遺物拓本図の作成、実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
- 平面図・写真類の版組み
- 検出遺構・出土遺物の報告書執筆
- 出土遺物、記録類の収納

３　調査の方法

（１）現地調査

①発掘区の設定

鷲足館跡の発掘調査は、平成24年度～28年度にかけて５度にわたる調査を実施した。本書では、１次調査範囲をＡ区、２次調査をＢ区、３次調査をＣ区、４次調査をＤ区、５次調査をＥ区とした。

②表土除去・遺構精査

表土除去作業は原則としてバックホウ（0.7 ㎥）による掘削としたが、急な斜面等については人力による掘削とした。表土掘削により発生した排土は、重機または人力により発掘区外の斜面に搬出した。なお、斜面での掘削作業が危険と判断された場合は安全帯を着用し作業を行った。遺構検出以降の作業は人力により行った。

③遺構番号

遺構番号は、現地調査の段階で遺構の種別ごとに１から通し番号を振り、各種記録類を作成した。遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりであるが、いわゆる城館の「曲輪」や「腰曲輪」と呼ばれる尾根上ないし斜面の平坦面については「平場」と呼ぶこととし略記号は設けなかった。「土塁」についても略記号は設けず「土塁跡１」と報告することとした。なお、「平場」と認識した遺構のうち、尾根頂部に位置する比較的面積の広い平場を「平場Ａ」、斜面等にみられる幅の狭い平場を「平場Ｂ」と便宜的に分け報告することとし、また、堀切や溝などの溝状の形状を呈する遺構はすべて「SD」として登録した。

④遺構測量

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション(SRX5X)及び電子平板システム（遺構くん cubic 2016 12.03)、一部の遺構平面図・遺構断面図・エレベーション図は手実測により縮尺 1／20 または 1/100 で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

⑤遺構の記録作成

今回の調査で検出した遺構のうち、平場、土塁、溝跡、土坑等については、原則として、すべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。掘立柱建物跡や柱穴列跡を構成する柱穴やその他のピット・小穴については、調査を円滑に進めるため、遺構平面の下場の計測を省略し、また堆積土が１層のみのピット類は、遺構断面図・写真等の記録作成の一部を省略した。なお、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録することとした。

⑥土層の記録作成

土層番号は、遺構内堆積層は上層から順にアラビア数字（算用数字）「1,2,3…」、基本層序はローマ数字「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…」を用いて表記した。土層の観察は『標準土色帖』(小山・竹原 1967) に従い「色相　明度/彩度」を数値と記号で示し、日本語表記を併記した。土性については、粒径の大きなものから順に「礫＞砂＞砂質シルト＞シルト＞粘土質シルト＞粘土＞」に分け、土層の混入物は多い方の順から「多量（多く）＞含む＞少量含む＞微量含む」と表記し、その他必要な事項は備考等に記録することとした。

⑦遺物の記録・取り上げ

遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物で且つ残存状況の良いもののみとした。遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

⑦写真撮影

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ(NikonD5300/レンズ SIGUMA 18-200mm/画質モードFINE)を使用した。発掘区の全景写真については、俯瞰システム（CUBIC）による撮影を行った。

（３）室内整理

①遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（かわらけなど）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・排土など）から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行った。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・登録】

遺物の抽出・登録は町担当職員（山田）が行った。遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外（基本層出土遺物も含む）出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。今回の調査では、出土遺物が非常に少ないこともあり、原則として小破片であっても、文様や器形などが特徴的なものや時期・産地推定が可能なものについても抽出の対象とした。抽出した資料は原則として報告書掲載遺物として扱い、それぞれ種別１点ごとに登録番号を付し、非抽出遺物は種別・出土遺構・層位ごとに分け袋詰めし、袋ごとに非抽出遺物の登録を行った。

遺物はそれぞれの種別ごとに登録を行った。遺物種別の略記号は、例言に示したとおりである。

【遺物の実測図作成】

遺物の実測図作成は、町職員（山田）・町調査補助員（藤田）・宮城県支援職員【山口貴久（宮城県教育庁文化財保護課　技師）】が行った。なお、実測図は原則として手実測により作成した。

【拓本図作成】

遺物の拓本図作成は町整理作業員が行い、報告書用の拓本図作成は町調査補助員（佐伯）が担当した。拓本図作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーでPCに画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース、掲載遺物の写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は､素図をスキャナーで取り込み､PC上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・加工作業は民間機関（株式会社アートプロフィール）に委託した。

②出土遺物等の自然科学分析

今回の以下の自然科学分析は、次の機関に業務委託により実施した。

○放射性炭素年代測定：㈱加速器分析研究所

③図面の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。記録写真の整理作業は、撮影年月日ごとにデータを整理し、それらのデータをコピーしたものに対しリネームを行った。その後、各種遺構ごとに分け収納した。報告書の版組み・執筆は、町職員（山田）が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みについては、遺構くん cubic 2016 12.03、Adobe Illustrator CS6、Adobe Photoshop CS6、Adobe InDesign CS6、表データ・報告書原稿の作成についてはMicrosoft Office Word ・Excel のソフトウェアを使用した。

第２章　発掘調査の成果

第１節　基本層序

鷲足館跡は、標高 50～130m の丘陵上に位置する。発掘調査を実施した A～D 区は連続した丘陵尾根上に位置するが、それぞれの発掘区の標高は大きく異なり、その堆積状況は一律とはない。また、A～D 区と E 区は離れた地点に位置する。このことから、遺跡全体の層序を整合的に把握することは困難と判断され、ここでは大局的に見た大別層位の提示にとどめることとしたい。

今回調査を実施した A～E 区の基本層序の概要をまとめると以下のとおりとなる。

[鷲足館跡 A～E 区　基本層序]

Ⅰ層：現代の表土。土色は灰黄褐色(10YR4/2)を基本とするが、地点により褐灰色(10YR4/1)や暗褐色(10YR3/4)など一様ではない。土性はシルトである。

Ⅱ層：遺物をほとんど含まない層で、調査区全体に堆積していた。土質は均一なため自然堆積と考えられる。混入物等の差異からⅡa 層[灰黄褐色（10YR5/2）砂質シルト土/地山粒子を少量含む]とⅡb 層[灰黄褐色（10YR5/3）砂質シルト土/地山粒子を多く含む]に細別され、Ⅱb 層→Ⅱa 層の順に堆積している。館跡廃絶後に堆積した旧表土とみられる。

Ⅲ層：基本層Ⅱ層（旧表土）と整地層（基本層Ⅳ層）ないし地山（基本層Ⅵ層）の間にみられる自然堆積層を一括してⅢ層とした。
地山への漸移層、斜面に広がる表土の再堆積層などで、地点により土色・土性が異なる。

Ⅳ層：基本層Ⅱ層（旧表土）または基本層Ⅲ層の下で確認した整地層。
平場の造成等により平場端部に敷き詰められた人為堆積層で、地山ブロックや焼土粒子・炭化物片等が混入している。A 区～D 区の平場で確認した。

Ⅴ層：整地層（基本層Ⅳ層）と地山の間にみられる自然堆積層を一括してⅤ層とした。
地山への漸移層、斜面に広がる表土の再堆積層などで、地点により土色・土性が異なる点はⅢ層と共通するが、Ⅲ層よりも古い時期に堆積した層である。なお、整地層が確認されていない地点においては、Ⅲ層とⅤ層の識別は困難である。

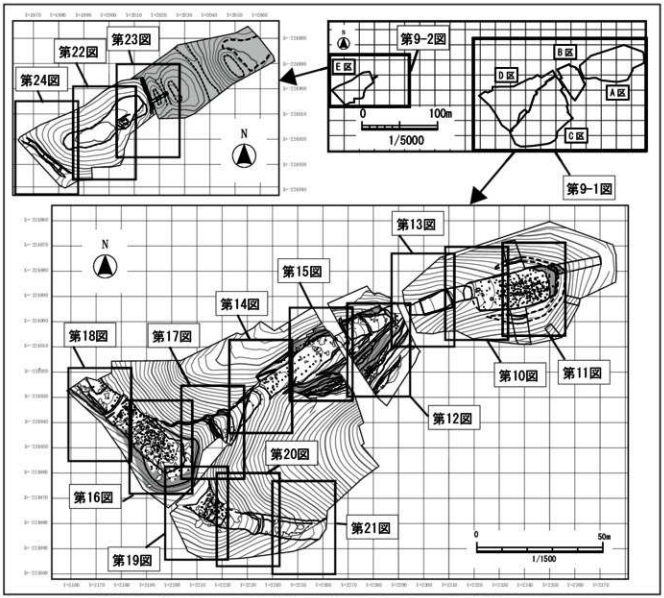
Ⅵ層：地山。各地点で異なる種類の地山が確認された。
基本的にはⅥb 層[浅黄色（2.5Y7/3）砂質シルト土/細砂を多く含む]→Ⅵa 層[浅黄色（2.5Y7/4）砂質シルト土/花崗岩質の砂礫を含む]の順に堆積していると思われる。

第２節　発見された遺構と遺物の概要

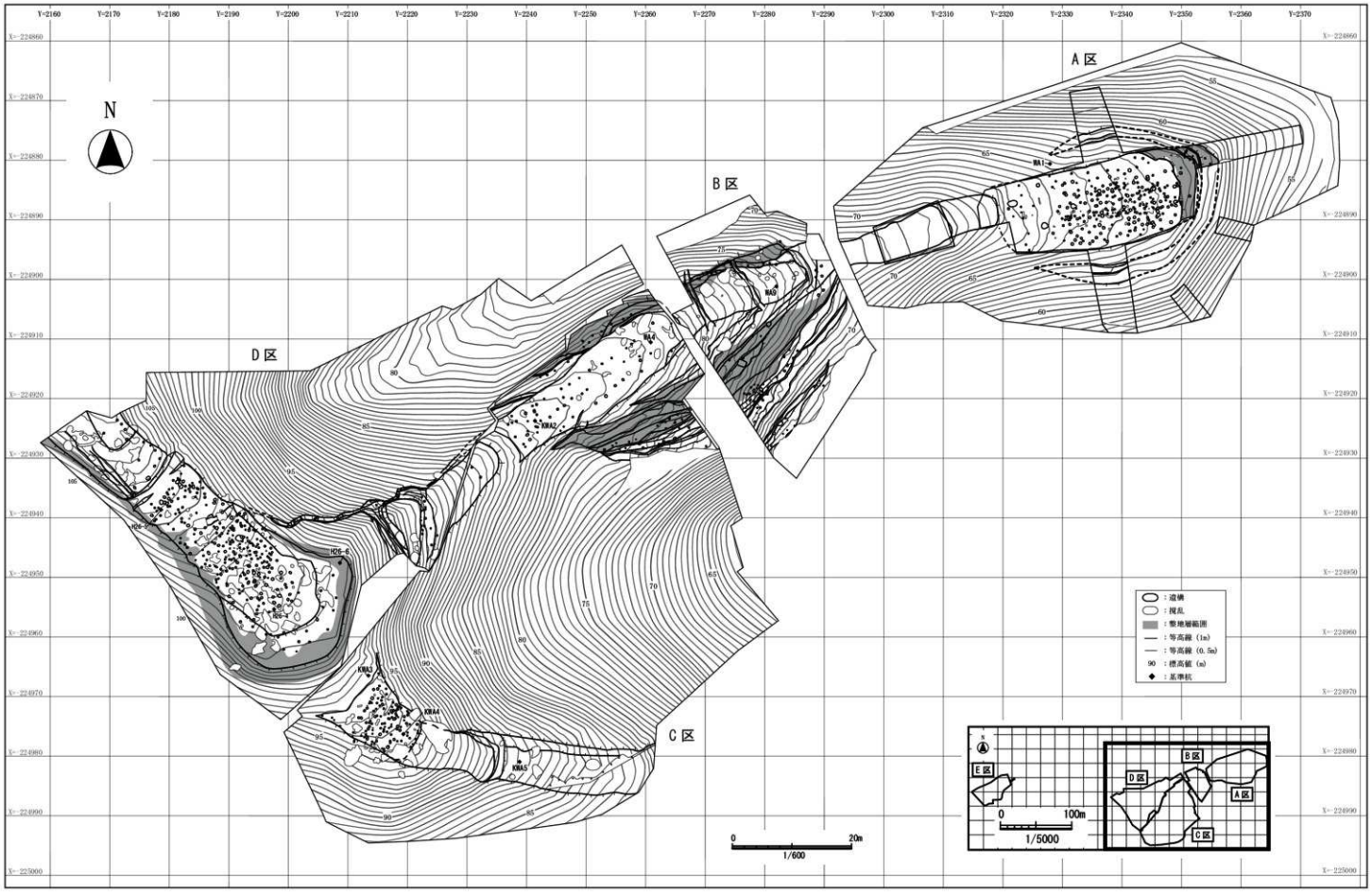
今回の調査（A～E 区）で検出した遺構は、平場 20 ヶ所（平場 A：6 ヶ所/平場 A-1～6、平場 B：14 ヶ所/平場 B-1～14）、緩斜面 2 ヶ所（緩斜面 1・2）、整地層、土塁跡 1 条（土塁跡 1）、溝跡 10 条（SD1～10）、掘立柱建物跡 33 棟（SB1～33）、柱穴列 70 条（SA1～70）、土坑 7 基（SK1～7）、柱穴跡・小穴 875 個（掘立柱建物跡・柱穴列跡を構成する柱穴を含む）である（掲載区分図：第 8 図、全体図：第 9-1・9-2 図、個別平面図：第 10～24 図参照）。

これらの遺構から出土した遺物は、遺物収納箱（長 59cm×幅 38cm×深 20cm）で 1 箱程度出土しており、その内訳は、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、施釉陶器、かわらけ、磁器、和鏡、石器である。検出した遺構のほとんどは、その特徴・出土遺物の年代から、中世に属するものと考えられる。

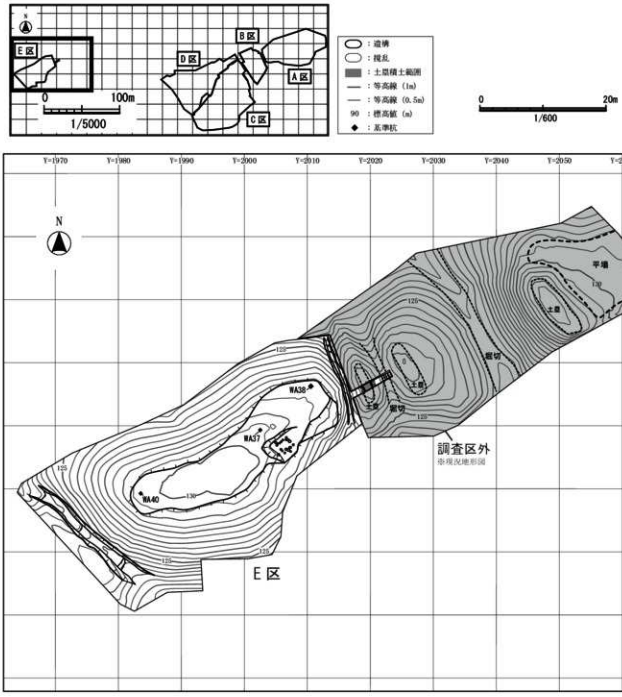
以下、発見された遺構・遺物について記述する。なお、本来であれば、中世の山城という性格を踏まえ、平場毎に構成する遺構を記述すべきであるが、本書ではまず、本章で遺構の種別毎に特徴等を記載することとし、平場毎の遺構の構成は総括（第 4 章）で改めてまとめることにした。また、本章で記載する遺構番号については、第 1 章の第 4 図で示した「鷲足館跡略測図」に明示した遺構名（例えば、平場 1 など）と一致していないことをあらかじめお断りしておく。



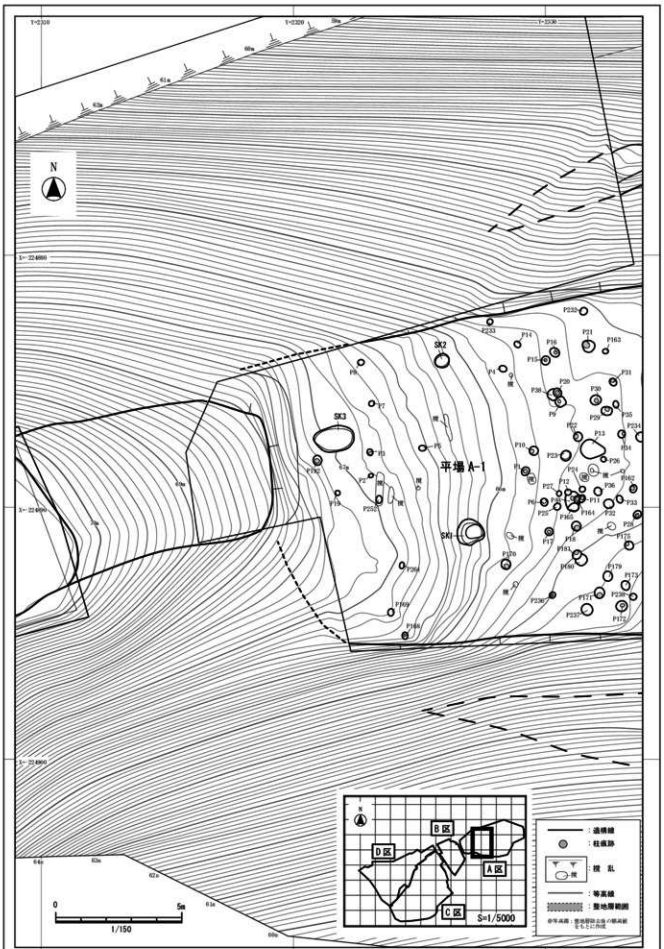
第８図　鷲足館跡1～5次調査　全体図・個別平面図 掲載区分図



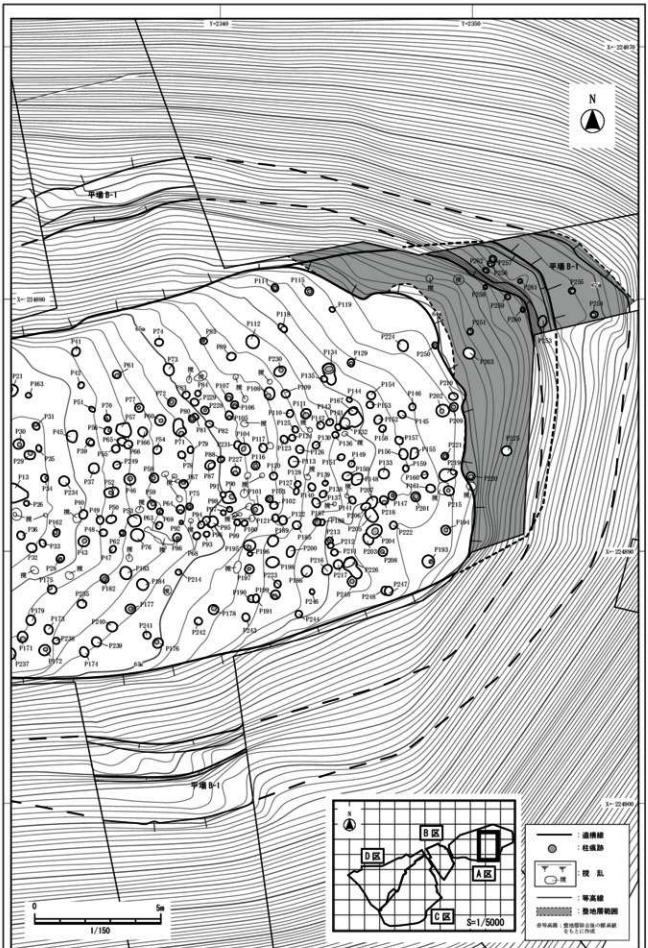
第9-1図　鷲足館跡　全体図（１）-A～D区-



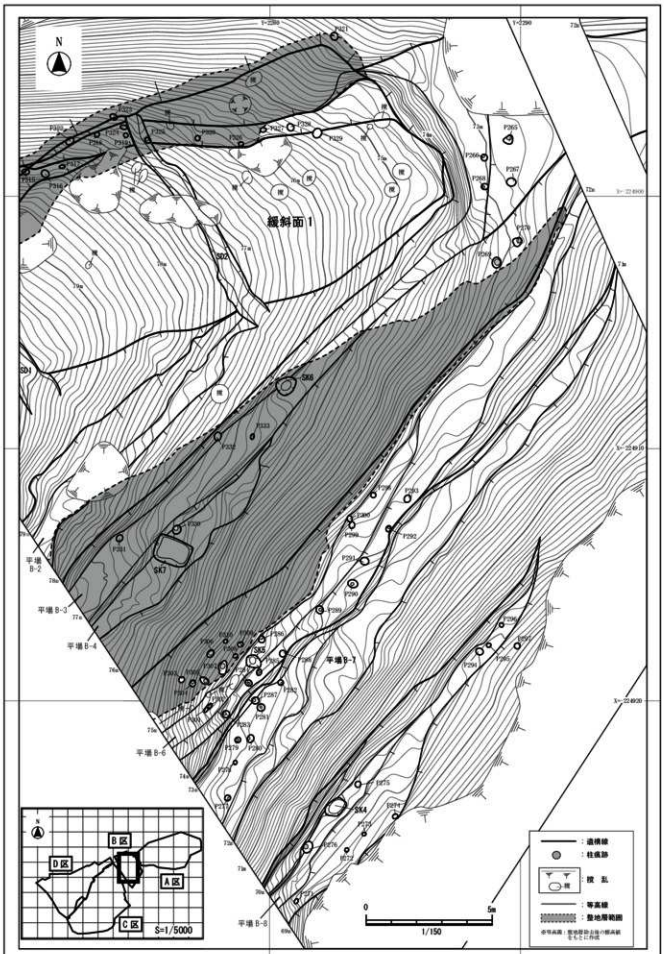
第9-2図　鷲足館跡　全体図（２）-E区-



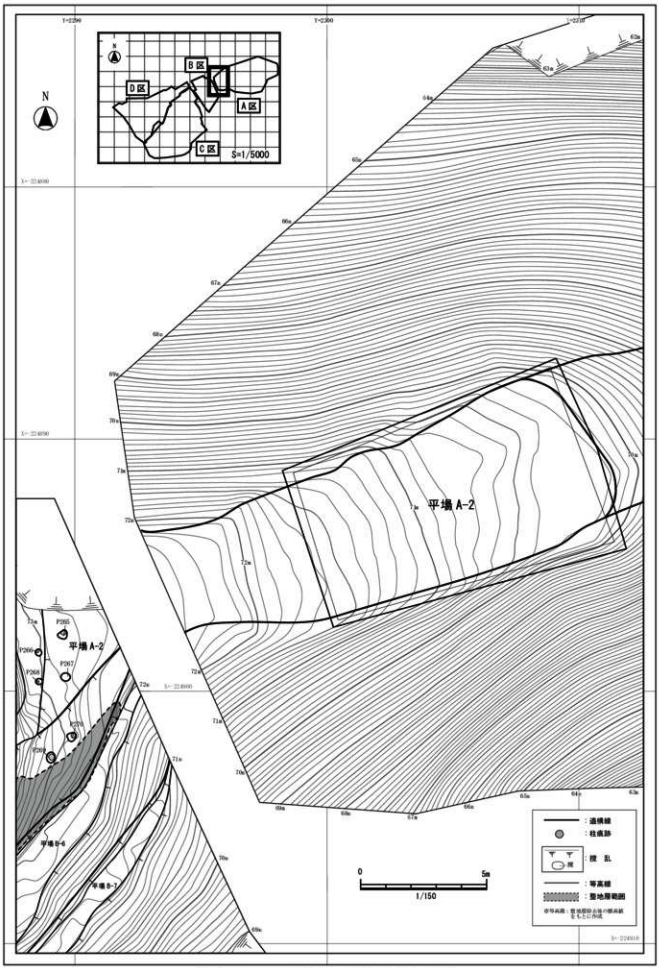
第10図　鷲足館跡　個別平面図（１）



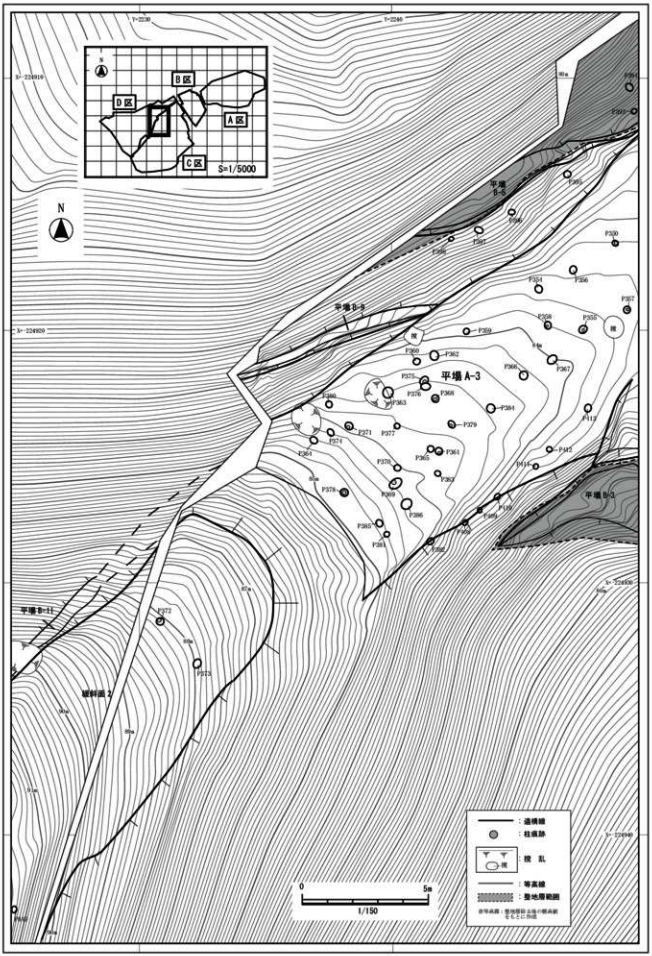
第11図　鷲足館跡　個別平面図（２）



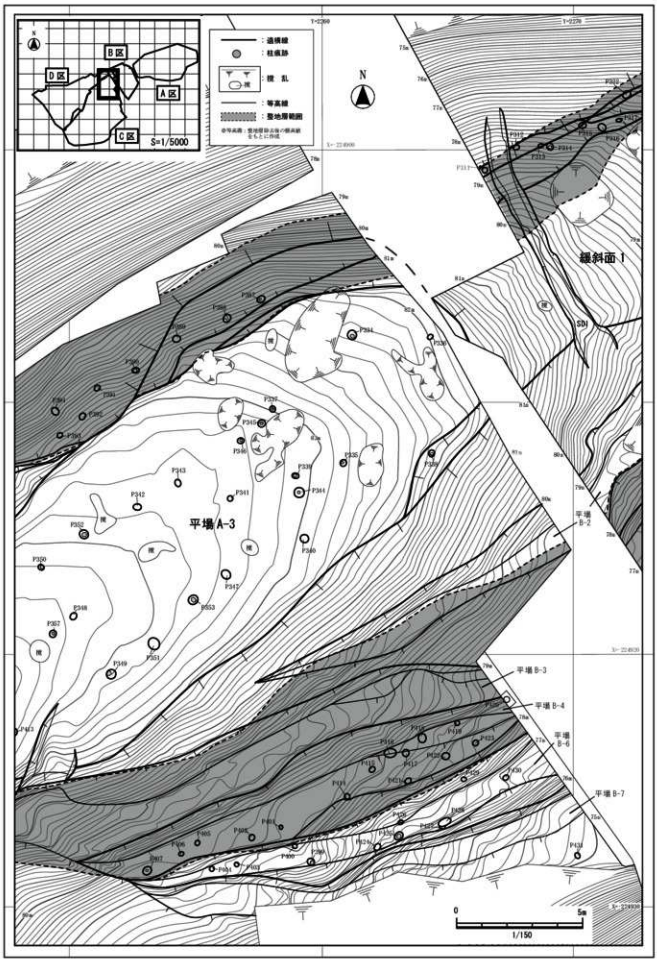
第12図　鷲足館跡　個別平面図（３）



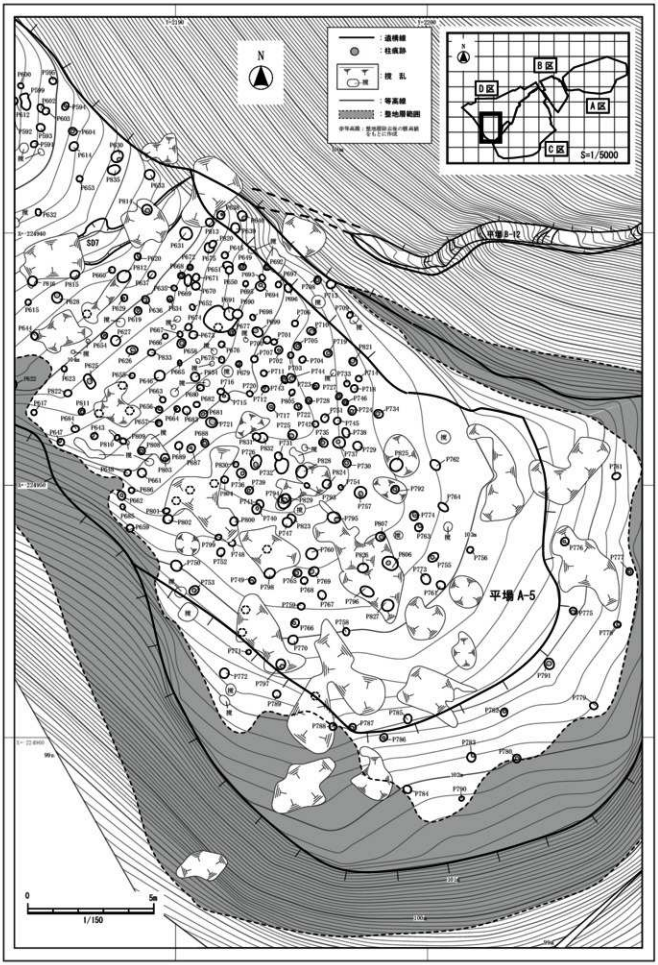
第13図　鷲足館跡　個別平面図（４）



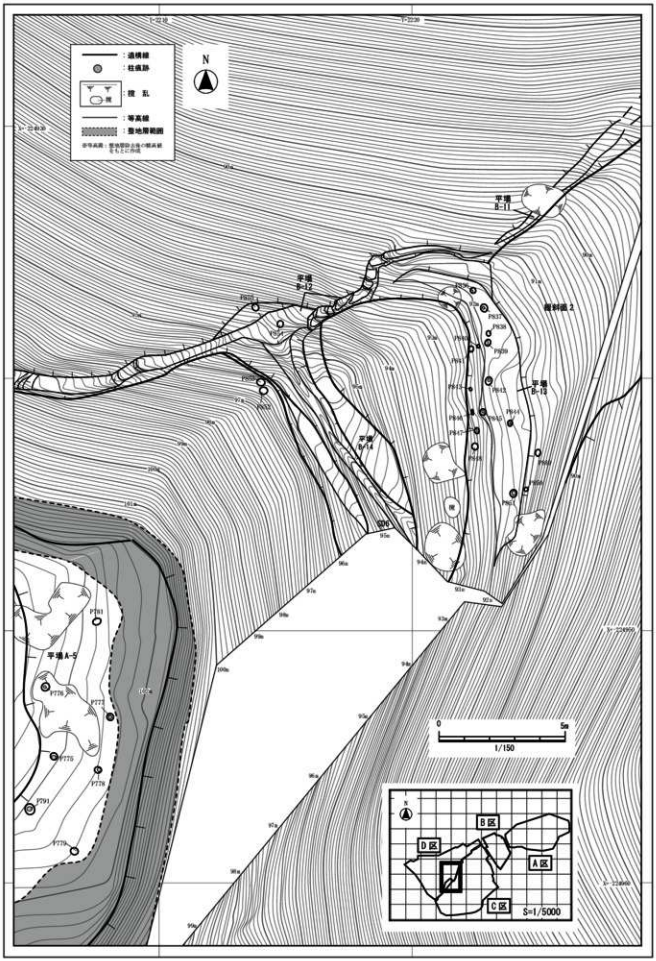
第14図　鷲足館跡　個別平面図（５）



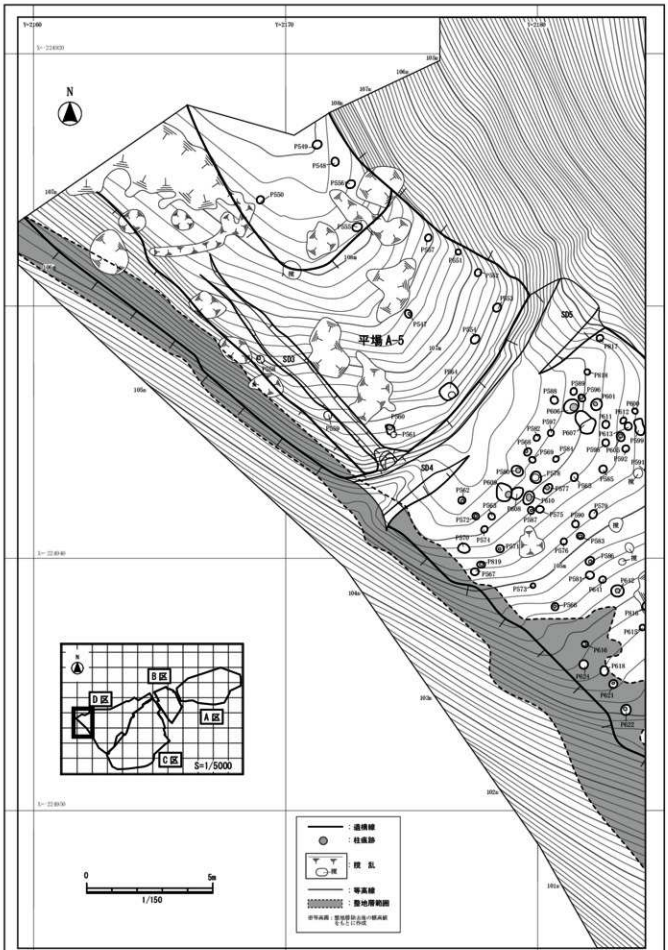
第15図　鷲足館跡　個別平面図（６）



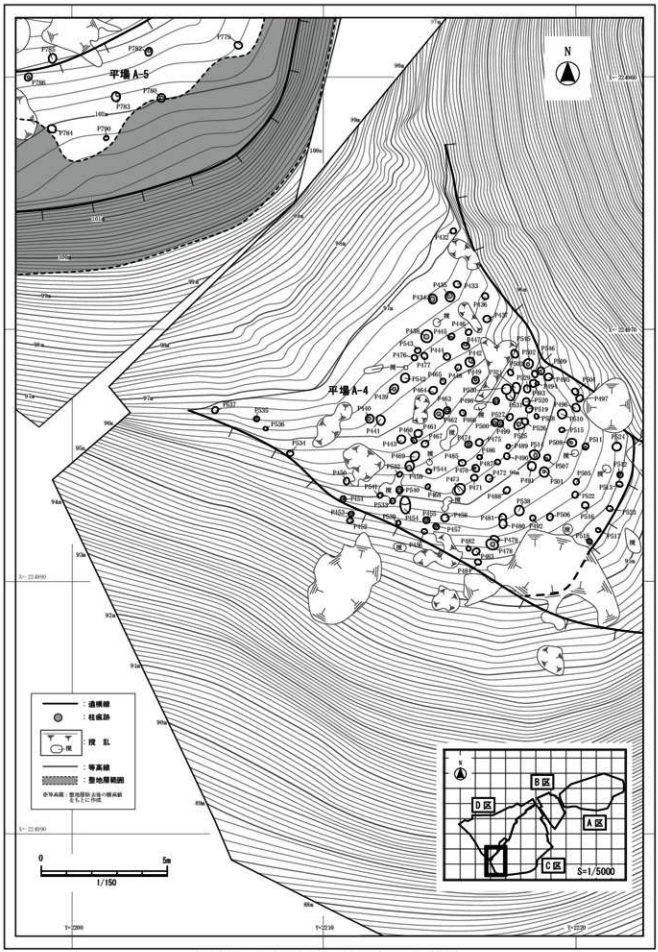
第16図　鷲足館跡　個別平面図（７）



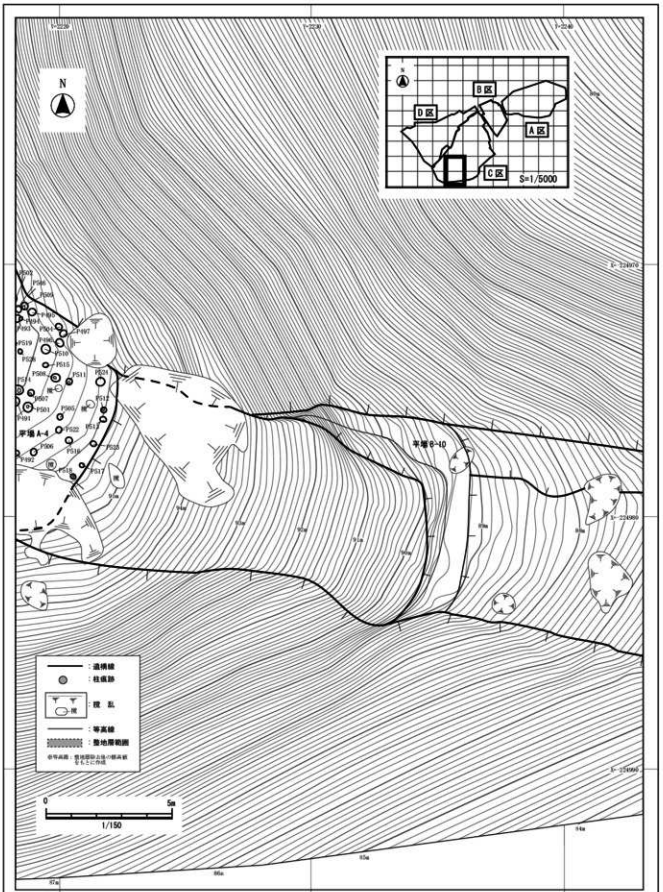
第17図　鷲足館跡　個別平面図（８）



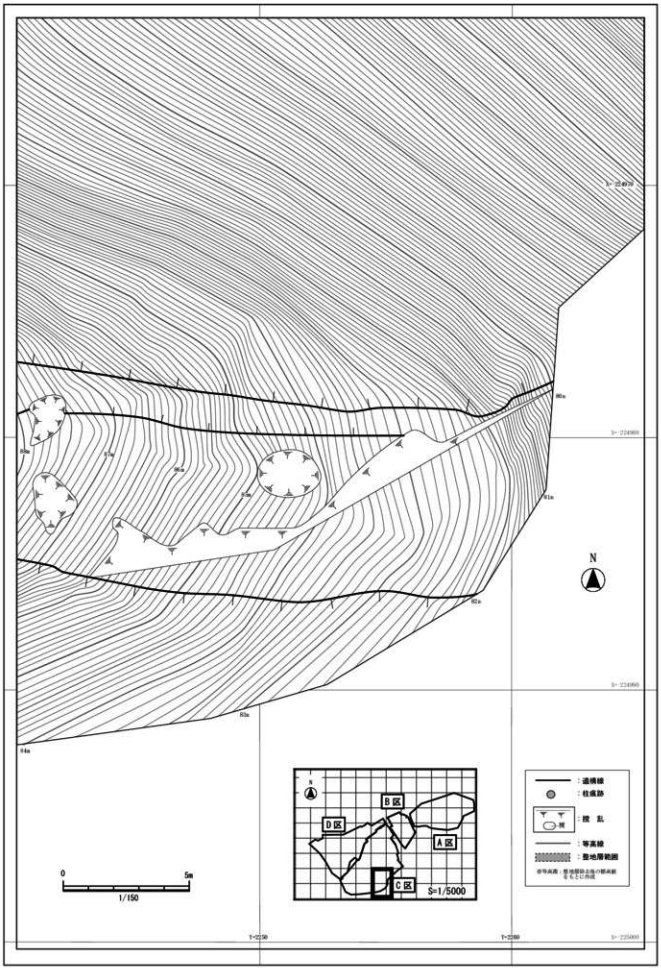
第18図　鷲足館跡　個別平面図（９）



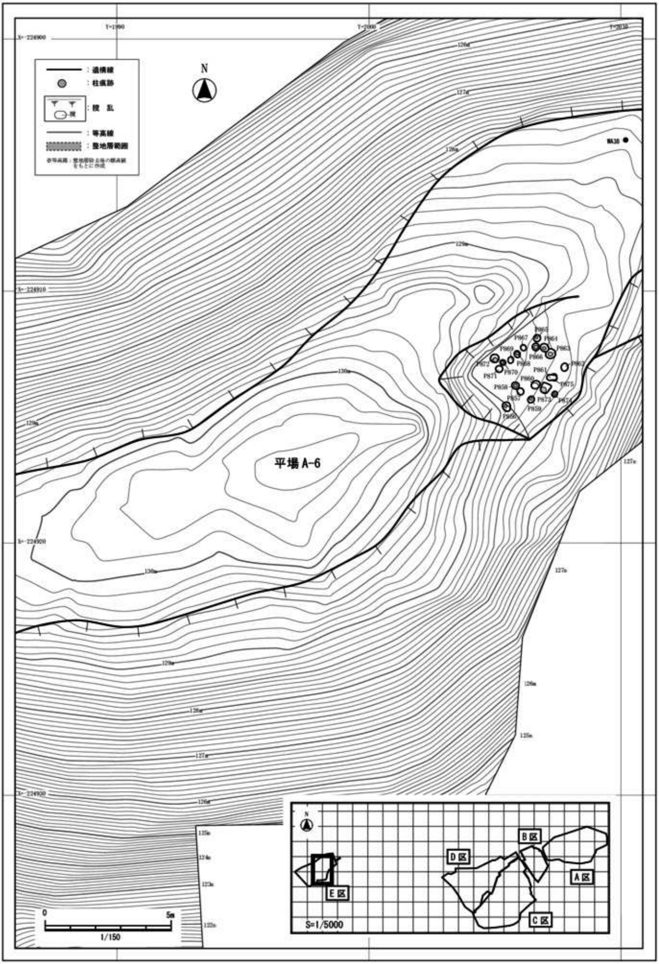
第19図　鷲足館跡　個別平面図（10）



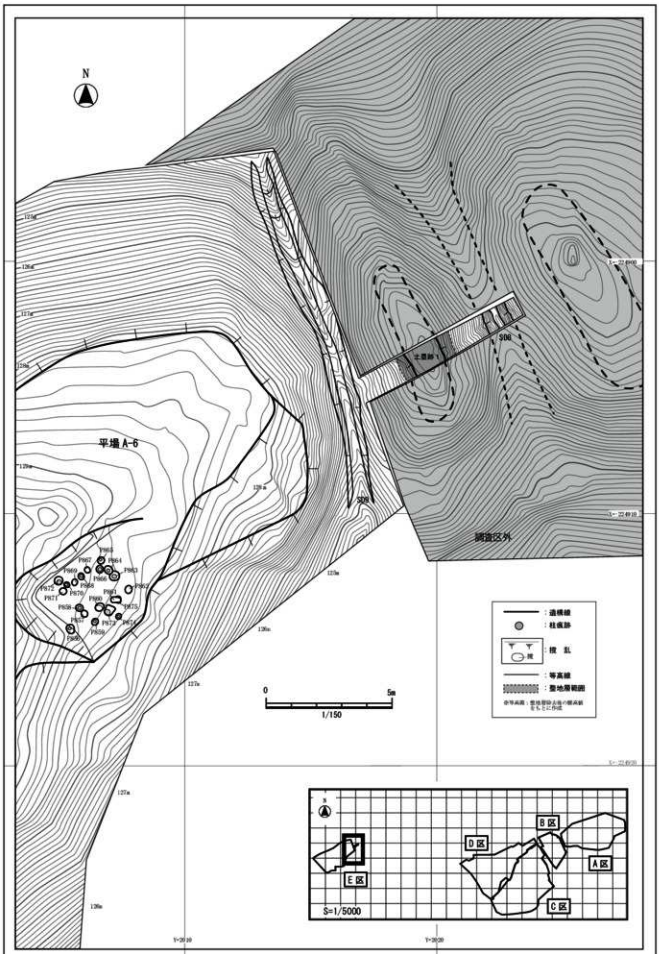
第20図　鷲足館跡　個別平面図（11）



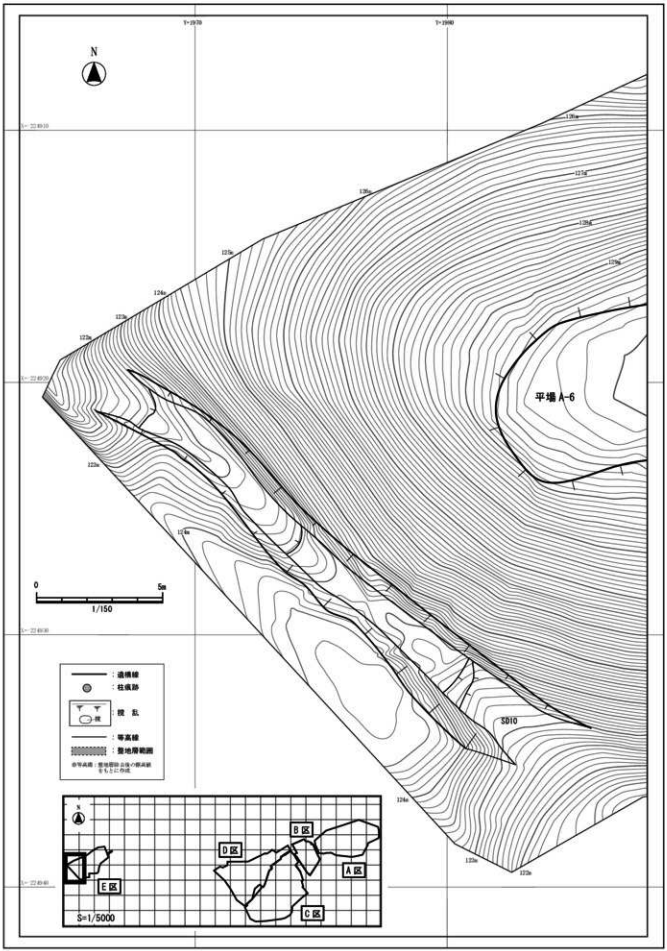
第21図　鷲足館跡　個別平面図（12）



第22図　鷲足館跡　個別平面図（13）



第23図　鷲足館跡　個別平面図（14）

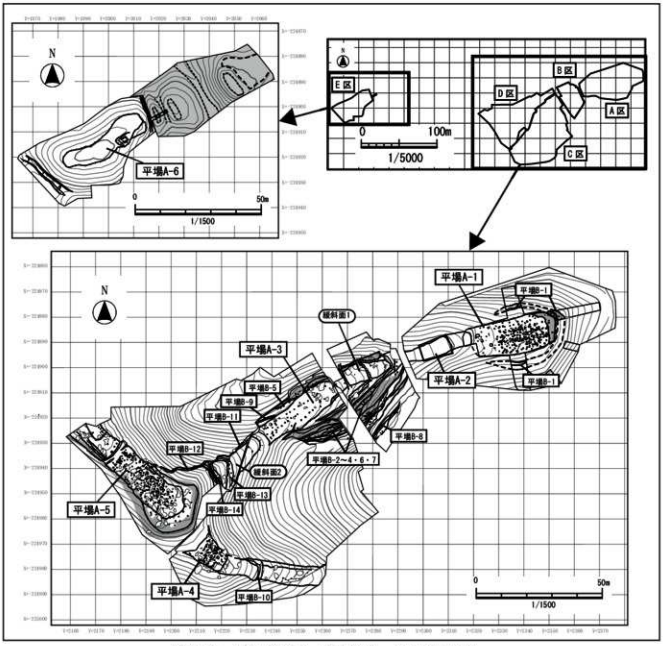


第24図　鷲足館跡　個別平面図（15）

1　平場

今回の調査区では、平場を 20 ヶ所（平場 A：6 ヶ所/平場 A-1～6、平場 B：14 ヶ所/平場 B-1～14）確認した。この他に各平場をつなぐ尾根上の緩斜面において、遺構や整地層が確認された範囲が 2 ヶ所（緩斜面 1・2）認められた（第 25 図）。これらの範囲については、傾斜角度の面から平場とは認定しがたい箇所であったことから、便宜上「緩斜面」という名称で報告することとした。なお、本書で使用した「平場」の名称の基準は第 1 章第 5 節 3 で示したとおりで、「尾根頂部に位置しその占有面積が比較的広い平場」を「平場 A」、「尾根上または斜面に位置し、幅が 2m 前後で狭く細長い平場」を「平場 B」と分けて報告している。

以下、平場・緩斜面の詳細について記載するが、それぞれの範囲で確認された建物跡や柱穴列跡などの各種の詳細は別項で個別に報告することとしたので、個別の遺構の詳細は別項を参照していただきたい。



第25図　鷲足館跡1～5次調査　平場の位置

（１）　平場 A-1・2、平場 B-1（第 25～30・119・120 図）

【平場 A-1】（第 25～30・119・120 図）

［位置］　A 区の標高 64.0～67.5m の尾根上に位置する。平場 A-1 の北・東・南側の斜面には平場 B-1、西側の尾根上には平場 A-2 が所在する。

［検出遺構］　平場の平坦面上で、掘立柱建物跡 16 棟（SB1～16）、柱穴列跡 11 条（SA1～11）、柱穴・小穴 252 個（P1～252：うち、SB・SA を構成する柱穴は 198 個）、土坑 3 基（SK1～3）、整地層を検出した。整地層は平場東端のみで確認している。

［概要］　平場東端の整地層と平場 B-1 との重複関係から、平場 A-1 は 1 度の改修があったとみられ、**第 1 期**（平場 A-1＋平場 B-1）→**第 2 期**（平場 A-1＋整地層）の大きく 2 期の変遷があったと想定される（第 1 期：第 28 図、第 2 期：第 29 図）。

［規模・形状］　第 1 期：東西 29.1m、南北 14.1m、面積約 390 ㎡である。第 2 期：平場東端の斜面を整地層で埋め立てることにより、平場を東に 4m ほど拡張している。その規模は東西 33.6m、南北 14.1m で、面積は約 440 ㎡である。平場斜面の傾斜角度は、北・南・東斜面が約 30～35°である。

［整地層］　平場 A-1 東端で確認した（第 27・29 図）。4 層（第 27 図土層断面 A-A’：3a～3d 層）に分けられ、地山ブロックを多く含み、しまりは強い。その厚さは 10cm～110cm ほどである。

［出土遺物］　平坦面の遺構検出面でかわらけ皿破片 1 点（10g）、中世陶器甕破片 1 点（390g）、平場東端の整地層 3d 層で天目茶碗破片 1 点（105g）が出土し、すべて図示した（実測図：第 119 図 10～12、写真：第 120 図）。

［その他］　整地層 3d 層（第 27 図土層断面 A-A’）に含まれていた炭化物片（試料 No：WA-1）の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代 1300～1393cal AD であった。

【平場 A-2】（第 25・26・28・29 図）

［位置］　A 区の標高 70.3～73.5m の尾根上に位置する。平場 A-2 の北・南側は急斜面、東側の尾根上には平場 A-1、西側の尾根上には緩斜面 1 が所在する。また平場 A-2 の西端は、緩斜面 1 の南斜面の平場 B-3 と接続する位置関係にある。

［検出遺構］　平場西端で柱穴列跡 2 条（SA18・19）を検出した。

［概要］　平場 A-2 ではその西端付近以外で遺構が確認されていないことから、基本的に建物等が存在しない平場であったと考えられる。

［規模・形状］　東西 22.8m、南北 4.0～6.6m の細長い平場で、その面積は約 130 ㎡である。平場北・南の斜面の傾斜角度は、約 30～35°である。

［出土遺物］　なし。

【平場 B-1】（第 25～28・30 図）

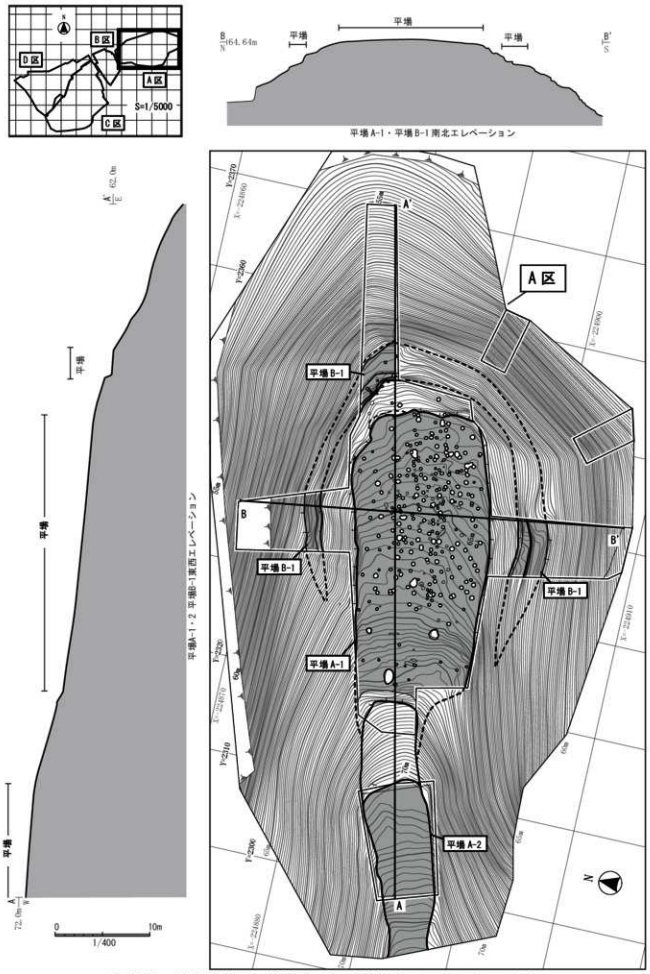
［位置］　A 区の平場 A-1 平坦面の北・東・南側の斜面上に位置する。検出位置の標高は 62m 前後である。発掘区の制約からその精査は一部にとどまったが、北・南斜面の状況から平場 B-1 は平場 A-1 の東半をコの字状に囲む平場だったと考えられる。

［検出遺構］　東側斜面の平坦面上で、柱穴・小穴 11 個（P253～262）を検出した。調査範囲が狭かったため認定には至らなかったが、斜面東側の平場 B-1 には柱穴列が配置されていた可能性が高い。

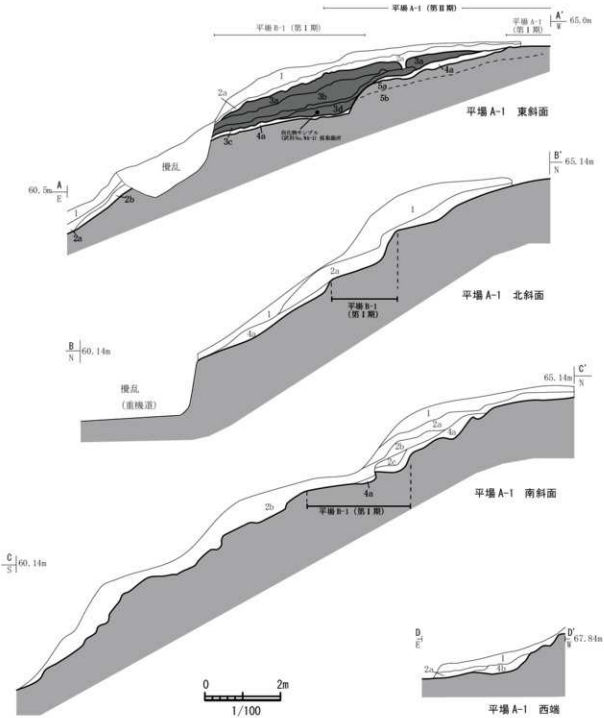
［概要］　平場 B-1 の東側斜面が平場 A-1 の整地層（第 27・30 図）により埋め立てられていた。このことから、平場 B-1 は整地層を伴う平場 A-1 の段階（平場 A-1 第 2 期）ではその機能を終えていたと考えられ、その前段階である平場 A-1 の第 1 期に伴う平場だったとみられる（第 28 図）。

［規模・形状］　平坦面の幅が約 1.1～2.7m ほどの細長い平場である。

［出土遺物］　なし。

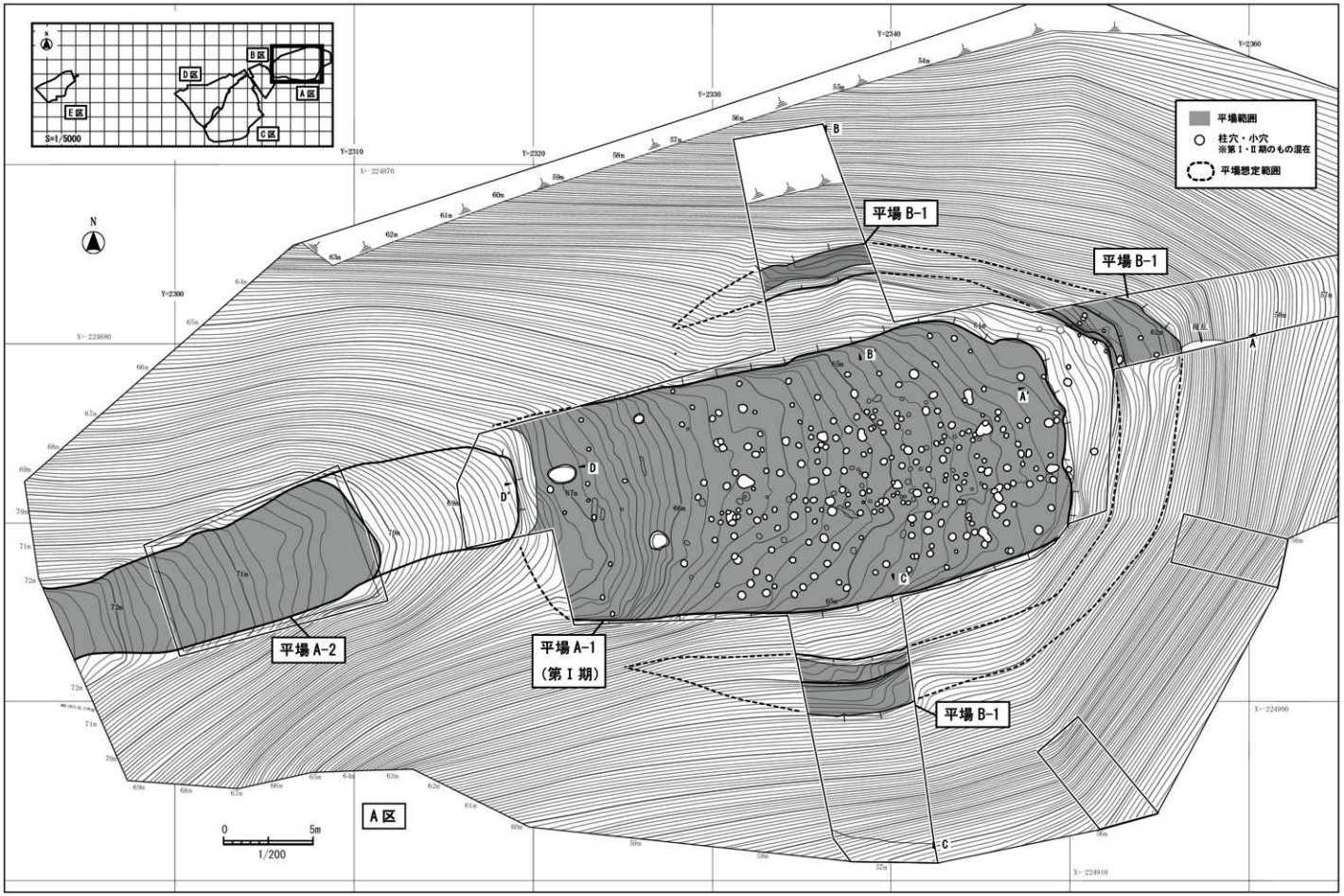


第26図　鷲足館跡　平場A-1～2、平場B-1エレベーション図

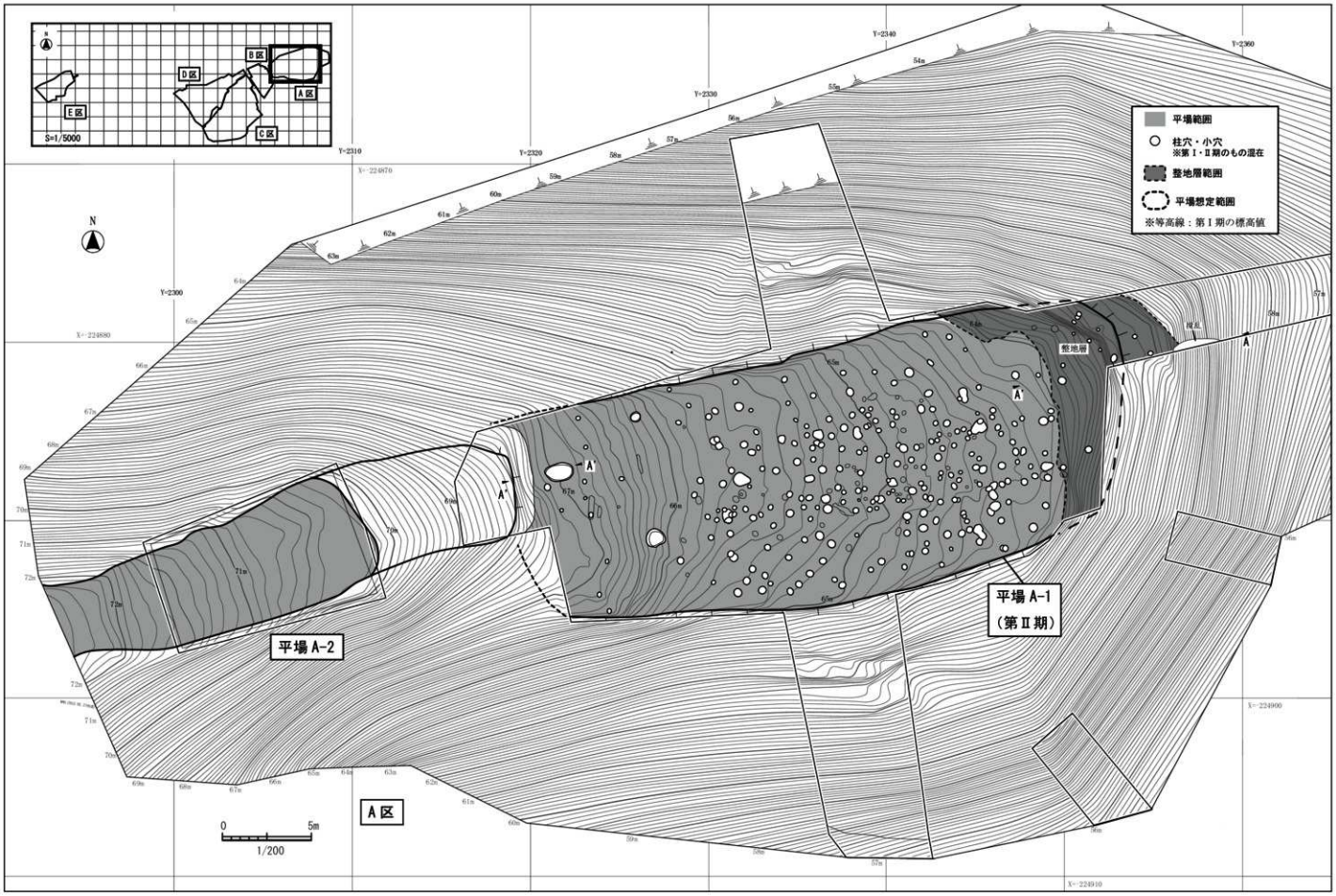


層	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	表土	基本層Ⅰ層
2a	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	整地層（人為）
2b	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
2c	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子・黒色土ブロック少量含む。	
3a	浅黄色(2.5Y7/4)	砂質シルト	地山ブロック（5b層起源）多量含む。しまり有。	
3b	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	炭化物片・地山ブロック多く含む。しまり有。	
3c	黒褐色(10YR3/1)	砂質シルト	炭化物片少量、地山ブロック含む。しまり有。	
3d	灰褐色(10YR6/2)	砂質シルト	炭化物片少量、地山粒子多く含む。しまり有。	
4a	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山粒子・小礫少量含む。	基本層Ⅵ層（地山）
4b	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山粒子・小礫少量含む。	
5a	浅黄色(2.5Y7/3)	砂質シルト	地山（地山・砂質層）	
5b	浅黄色(2.5Y7/4)	砂質シルト	地山（花崗岩質の砂礫層）	

第27図　鷲足館跡 A区　平場A-1・平場B-1　土層断面図



第28図　鷲足館跡　平場A-1（第Ⅰ期）・平場A-2・平場B-1　平面図



第29図　鷲足館跡　平場A-1（第Ⅱ期）　平面図

1．平場 A-1 平坦面の状況（西から撮影）

2．平場 B-1 及び平場 A-1 東端 整地層断面（北から撮影）

第30図　平場A-1・平場B-1の状況

（２）　緩斜面１、平場Ａ-3、平場Ｂ-2～4・6～9(第 25・31～36・119・120 図)

【緩斜面１】(第 25・31・32・34・35・36 図)

［位置］　Ｂ区の標高 74.5～81.8m の尾根上に位置する。その占有面積は平場と同等であるが、他の平場と比較し平坦面の傾斜（傾斜角度 17°）がきつく、傾斜角度の面で「平場」とは認定しがたかったことから「緩斜面」として取り扱った。緩斜面１の北・南側は急斜面となるが、南側の斜面には平場Ｂ-2～4・6～8 の細長い平場が段上に配置される。また、東側の尾根上には平場Ａ-2、西側の尾根上には平場Ａ-3 が所在する。

［検出遺構］　尾根上の緩斜面上で、溝跡２条（SD1・2）、柱穴列跡２条（SA12・13）、柱穴・小穴 19 個（P311～329：うち、SA を構成する柱穴は 15 個）、整地層を検出した。整地層は尾根北端と尾根南斜面の２か所で確認している。

［概要］　尾根北端の溝跡・柱穴列跡と整地層、尾根南斜面の平場Ｂ-2～4・6～8 と整地層の関係から、緩斜面１は北側と南側それぞれ１度の改修があったとみられる。具体的にみてみると、まず尾根北端の範囲では、整地層除去後に SA12・13 の柱穴、SD1・2 の北端部が検出されており、**第１期**（緩斜面１＋柱穴列＋溝跡）**→第２期**（緩斜面１＋整地層）の大きく２期の変遷があったと想定される。一方、尾根南側の斜面については、整地層除去前の段階の斜面で平場Ｂ-6～8、整地層除去後に平場Ｂ-2～4 を検出した。これらの平場Ｂの堆積状況から、緩斜面１の南斜面については、**第１期**（緩斜面１＋平場Ｂ-2～4）**→第２期**（緩斜面１＋整地層＋平場Ｂ-6～8）の大きく２期の変遷があったと想定される。以上のように、緩斜面１の北・南側では各１回の改修が認められた。それぞれの改修に伴う整地層はその厚さや構築方法に若干の違いがあるものの、堆積土に大きな差異は認めらないことから、緩斜面１の変遷は大きく２時期あったと考えられる（第１期：第 35 図、第２期：第 36 図）。

［規模・形状］　第１期：東西 22.9m、南北 7.6m、面積約 140 ㎡である。第２期：緩斜面北端の斜面を整地層で埋め立てることにより、その範囲を北に 1.5m ほど拡張している。その規模は東西 22.9m、南北 9.1m で、面積は約 180 ㎡である。緩斜面南北の斜面傾斜角度は、北斜面が約 30～37°、南斜面が約 23～32°である。

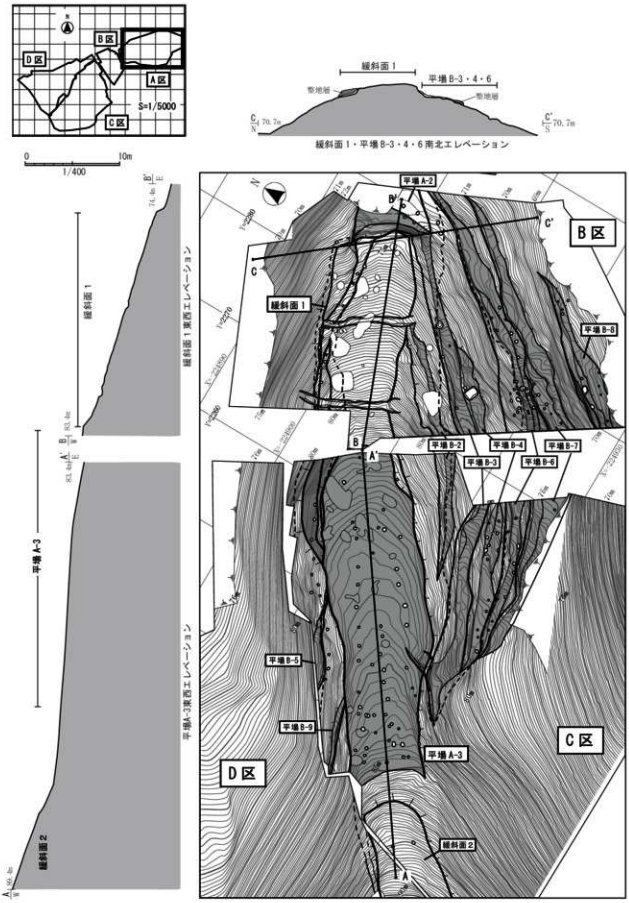
［整地層］　緩斜面尾根上の北端と南斜面で確認した（第 32・36 図）。この整地層は緩斜面西側に位置する平場Ａ-3 においても同様の位置で確認しており、一連のものと考えられる。北端の整地層は３層（第 32 図土層断面 F-F’・E-E’：23～25 層）、南斜面の整地層は７層（第 32 図土層断面 A-A’～D-D’：16～22 層）に分けられ、地山粒子・ブロックを多く含み、しまりは強い。その厚さは北端の整地層で 30cm～40cm、南斜面の整地層で 20～150cm ほどである。

［出土遺物］　なし。

【平場Ａ-3】(第 25・31・33～36・119・120 図)

［位置］　Ｃ区の標高 81.8～85.1m の尾根上に位置する。平場Ａ-3 の東側の尾根上には緩斜面１、西側の尾根上には緩斜面２が所在する。また、その北側は斜面と平場Ｂ-5・9、南側の斜面には平場Ｂ-2～4・6・7 の細長い平場が段上に配置される。

［検出遺構］　平場の平坦面上と北側斜面上部で柱穴列跡９条（SA20～26・31・32）、柱穴・小穴 69 個（P334～371・374～398・408～413：うち、SA を構成する柱穴は 53 個）、整地層を検出した。整地層は平場の北端及び北斜面と南斜面の２か所で確認している。この他、SA25 柱穴列東端と SA26 柱穴列西端の間で最大幅 1.8m ほどの溝状の窪みを確認した（第 35 図）。この窪みについては、特に遺構番号は付していないが、平場Ａ-3 に伴うものと考えられる。



第31図　鷲足館跡　平場A-3、緩斜面1、平場B-2～9エレベーション図

［概要］　平場 A-3 北側の平場 B-5・9、柱穴列跡と整地層、南斜面の平場 B-2～4・6・7 と整地層の関係から、緩斜面 1 は北側と南側それぞれ 1 度の改修があったとみられる。この状況は東側に隣接する緩斜面 1 と同様で、平場 A-3 の北側・南側の各整地層とそれぞれ重複関係にある遺構の状況から、平場 A-3 北側の範囲では、**第 1 期**（平場 A-3＋北斜面：柱穴列 SA20・21、平場 B-5）→**第 2 期**（平場 A-3＋整地層＋平場 B-9）の大きく 2 期の変遷、南側の斜面については、**第 1 期**（平場 A-3＋平場 B-2～4）→**第 2 期**（平場 A-3＋整地層＋平場 B-6・7）の大きく 2 期の変遷があったと想定される。以上のように、平場 A-3 では、緩斜面 1 と同様に北・南側では各 1 回の改修が認められた。前述のとおり、この整地層は、緩斜面 1 と一連のものと考えられることから、平場 A-3 においてもその変遷は大きく 2 時期あったとみられる（第 1 期：第 35 図、第 2 期：第 36 図）。

［規模・形状］　第 1 期：東西 34.5m、南北 7.6～9.5m、面積約 305 ㎡である。第 2 期：平場の北東端の斜面を整地層で埋め立てることにより、その範囲を北東に 2.4m ほど拡張している。その規模は東西 34.5m、南北 7.6～11.9m で、面積は約 325 ㎡である。平場斜面の傾斜角度は、北斜面が約 30～38°、南斜面が約 26～33° である。

［整地層］　平場の北端及び北斜面と南斜面で確認した（第 36 図）。この整地層は平場 A-3 東側に位置する緩斜面 1 で確認した整地層と一連のものと考えられる。北端の整地層は 2 層（第 33 図土層断面 I-I’・J-J’：23・24 層）、南斜面の整地層は 3 層（第 33 図土層断面 H-H’・G-G’：17・18・21 層）に分けられ、地山粒子・ブロックを多く含み、しまりは強い。その厚さは北端の整地層で 10cm～40cm、南斜面の整地層で 20～85cm ほどである。

［出土遺物］　平坦面南側斜面の自然堆積層で縄文土器深鉢破片 1 点（130g）、南斜面の整地層 18・21 層で中世陶器甕 3 点（220g）・灰釉陶器折縁皿破片 1 点（20g）・天目茶碗破片 1 点（20g）が出土し、このうち縄文土器以外の遺物 5 点を図示した（実測図：第 119 図 13～17、写真：第 120 図）。

［その他］　南側斜面の整地層 21 層（第 33 図土層断面 H-H’）に含まれていた炭化物片（試料 No：WA-4・5）の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は WA-4 が 1415～1435cal AD、WA-5 が 1436～1457cal AD であった。

【平場 B-2】（第 25・31～34・35 図）

［位置］　B 区緩斜面 1 及び C 区平場 A-3 東半の南斜面上に位置する。検出位置の標高は 77～82m 前後であり、平場の東端が低く、西端が高い。平場 B-2 の東端は緩斜面 1 上に位置する SD2 溝跡の南端と接続し、その西端は平場 A-3 中央付近の斜面で途切れる。

［検出遺構］　なし。

［概要］　緩斜面 1 及び平場 A-3 の整地層により埋め立てられていることから、緩斜面 1・平場 A-3 の第 1 期に伴う平場とみられる。なお、平場 B-2 の斜面側の平坦面の一部は斜面に盛土（31 層：第 32 図土層断面 D-D’/第 33 図土層断面 G-G’）を行い造成されている。

［規模・形状］　検出長約 24m、平坦面の幅が約 0.5～1.0m ほどの東西方向に細長い平場である。

［出土遺物］　なし。

［その他］　緩斜面 1 西端の斜面部に位置する平場 B-2 平坦面の直上に堆積する自然堆積層 27 層（第 32 図土層断面 D-D’）に含まれていた炭化物片（試料 No：WA-2）の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 885～966cal AD で、平安時代に相当する。平場 B-2 は、その構造等の特徴から周辺の平場・柱穴列跡と同時期のものと考えられることから、今回分析した試料は、遺構より古い時期の炭化物が混入したものと考えられる。

【平場 B-3】（第 25・31～34・35 図）

［位置］　B 区緩斜面 1 の東・南側斜面及び C 区平場 A-3 の南斜面上に位置する。検出位置の標高は 73～83m 前後であり、平場の東端が低く、西端が高い。平場 B-3 の東端は緩斜面 1 の東側に位置する平場 A-2 西端と接続する。また、B 区の緩斜面 1 の南側斜面中央付近で平場 B-4 とも接続する位置関係にある。平場 B-3 の西端は、平場 A-3 西側付近の斜面で途切れるが、その途切れる地点の北側にある平場 A-3 の溝状の窪みと接続する。

［検出遺構］　B 区の平坦面上で土坑 1 基（SK6）、柱穴・小穴 3 個（P331～333）を検出した。これらは平場 B-3 に伴うものとみられる。

［概要］　緩斜面 1 及び平場 A-3 の整地層により埋め立てられていることから、緩斜面 1・平場 A-3 の第 1 期に伴う平場とみられる。なお、平場 B-3 の斜面側の平坦面の一部は斜面に盛土（32 層：第 32 図土層断面 C-C’・D-D’/第 33 図土層断面 G-G’）を行い造成されている。

［規模・形状］　検出長約 59.1m、平坦面の幅が約 0.5～2.0m ほどの東西方向に細長い平場である。

［出土遺物］　なし。

【平場 B-4】（第 25・31～34・35 図）

［位置］　B 区緩斜面 1 の中央南側斜面及び C 区平場 A-3 の南斜面上に位置する。検出位置の標高は 75～80m 前後であり、平場の東端が低く、西端が高い。平場 B-4 の東端と西端は平場 B-3 と接続する。

［検出遺構］　土坑 1 基（SK7）、柱穴列 2 条（SA27・28）、柱穴・小穴 16 個（P330・401・402・405～407・414～423：うち、SA を構成する柱穴は 14 個）を検出した。これらは平場 B-4 に伴うものとみられる。

［概要］　緩斜面 1 及び平場 A-3 の整地層により埋め立てられていることから、緩斜面 1・平場 A-3 の第 1 期に伴う平場とみられる。

［規模・形状］　検出長約 34m、平坦面の幅が約 0.6～1.7m ほどの東西方向に細長い平場である。

［出土遺物］　なし。

【平場 B-5】（第 25・31・33・35 図）

［位置］　C 区平場 A-3 中央付近の北斜面上に位置する。検出位置の標高は 80～83m 前後であり、平場の西端が低く、東端が高い。平場 B-5 の東端は平場 A-3 と接続する。西端は C 区端まで続いており、隣接する D 区でもその検出が予想されたが、急斜面のため残存状況を確認できなかった。

［検出遺構］　なし。

［概要］　平場 A-3 の整地層により埋め立てられていることから、平場 A-3 の第 1 期に伴う平場とみられる。

［規模・形状］　検出長約 9.5m、平坦面の幅が約 0.2～1.9m ほどの東西方向に細長い平場である。

［出土遺物］　なし。

【平場 B-6】（第 25・31～34・36 図）

［位置］　B 区緩斜面 1 及び C 区平場 A-3 の南斜面上に位置する。検出位置の標高は 72.5～79.5m 前後であり、平場の東端が低く、西端が高い。平場 B-6 は、調査前の段階でも段状の地形がある程度確認できた平場である。

［検出遺構］　土坑 1 基（SK5）、柱穴列 3 条（SA14・29・30）、柱穴・小穴 34 個（P283～286・288～293、298～310、399・400・403・404・424～430：うち、SA を構成する柱穴は 18 個）を検出した。これらは平場 B-6 に伴うものとみられる。

［概要］　緩斜面 1 及び平場 A-3 の整地層・斜面の堆積状況から緩斜面 1・平場 A-3 の第 2 期に伴う平場とみられる。

［規模・形状］　検出長約 51.8m、平坦面の幅が約 0.3～2.2m ほどの東西方向に細長い平場である。

［出土遺物］　なし。

【平場 B-7】（第 25・31～34・36 図）

［位置］　B 区緩斜面 1 及び C 区平場 A-3 の南斜面上に位置する。検出位置の標高は 71～79m 前後であり、平場の東端が低く、西端が高い。平場 B-7 は、調査前の段階でも段状の地形がある程度確認できた平場である。

［検出遺構］　柱穴列跡 1 条（SA15）、柱穴・小穴 8 個（P277～282・287・431：うち、SA を構成する柱穴は 4 個）を検出した。これらは平場 B-7 に伴うものとみられる。

［概要］　緩斜面 1 及び平場 A-3 の整地層・斜面の堆積状況から緩斜面 1・平場 A-3 の第 2 期に伴う平場とみられる。

［規模・形状］　検出長約 51.5m、平坦面の幅が約 0.6～3.3m ほどの東西方向に細長い平場である。

［出土遺物］　なし。

【平場 B-8】（第 25・31・32・36 図）

［位置］　B 区緩斜面 1 の南斜面上に位置する。検出位置の標高は 68.9～70.1m 前後であり、平場の東端が低く、西端が高い。平場 B-8 の東端は緩斜面 1 の斜面東側で途切れる。平場 B-8 の西側は B 区の調査区外へ延びるが、その西側の C 区平場 A-3 の斜面上では確認されていないことから、B 区と C 区の間で途切れるとみられる。なお、平場 B-8 は、調査前の段階でも段状の地形がある程度確認できた平場である。

［検出遺構］　土坑 1 基（SK4）、柱穴列跡 2 条（SA16・17）、柱穴・小穴 10 個（P271～276・294～297：うち、SA を構成する柱穴は 8 個）を検出した。これらは平場 B-8 に伴うものとみられる。

［概要］　緩斜面 1 の整地層・斜面の堆積状況から緩斜面 1 の第 2 期に伴う平場とみられる。

［規模・形状］　検出長約 17.5m、平坦面の幅が約 0.4～2.1m ほどの東西方向に細長い平場で、西側付近は段状になる。

［出土遺物］　なし。

［その他］　緩斜面 1 西端の斜面部に位置する平場 B-8 平坦面の直上に堆積する自然堆積層 14 層（第 32 図土層断面 D-D’）に含まれていた炭化物片（試料 No：WA-3）の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 1286～1385cal AD であった。

【平場 B-9】（第 25・31・33・36 図）

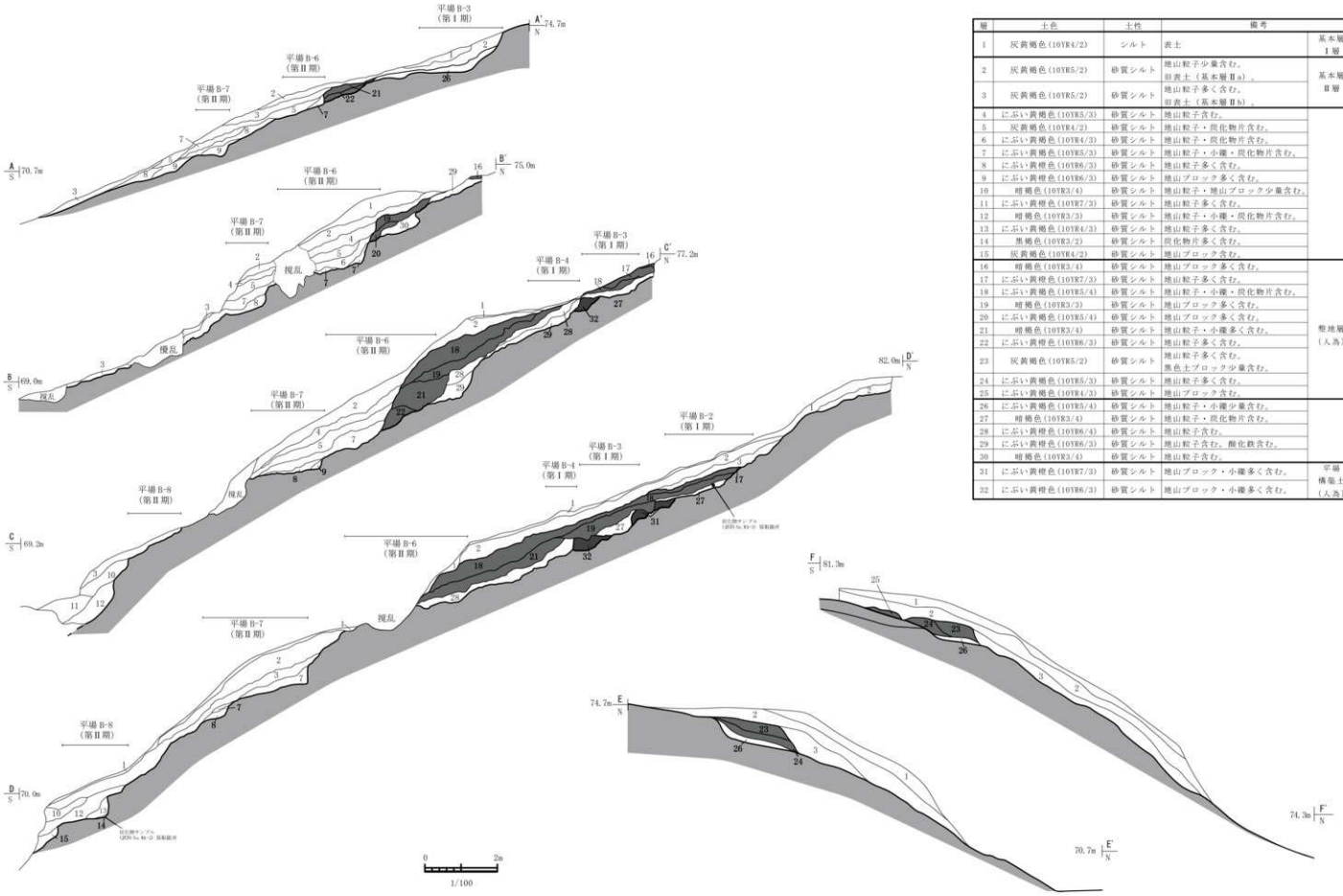
［位置］　C 区平場 A-3 西部の北斜面上に位置する。検出位置の標高は 82.5～83.5m 前後であり、平場の西端が低く、東端が高い。平場 B-9 の東端は平場 A-3 と接続する。西端は平場 B-5 と同様、C 区端まで続いており、隣接する D 区でもその検出が予想されたが、急斜面のため残存状況を確認できなかった。

［検出遺構］　なし。

［概要］　同斜面上に位置する平場 B-5 と立地・形状が類似していることから、平場 B-5・9 は同様の機能を有した平場であったと考えられる。平場 B-5 が平場 A-3 の第 1 期に伴う遺構で、その後、整地層により埋め立てられたことを踏まえると、平場 B-9 は平場 A-3 の第 2 期に伴う平場である可能性が高い。

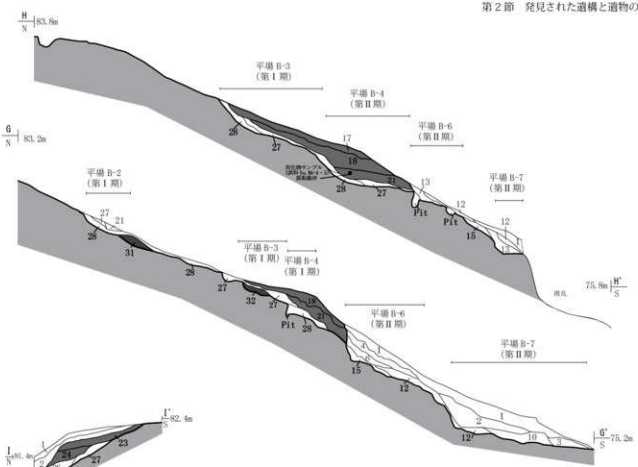
［規模・形状］　検出長約 8.3m、平坦面の幅が約 0.3～0.4m ほどの東西方向に細長い平場である。

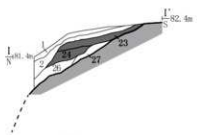
［出土遺物］　なし。

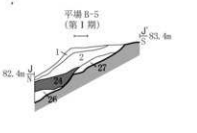


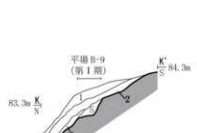
層	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	表土	基本層Ⅰ層
2	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山粒子少量含む。 旧表土（基本層Ⅱa）。	基本層Ⅱ層
3	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山粒子多く含む。 旧表土（基本層Ⅱb）。	
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子含む。	
5	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山粒子・炭化物片含む。	
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山粒子・炭化物片含む。	
7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子・小礫・炭化物片含む。	
8	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
9	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	
10	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子・地山ブロック少量含む。	
11	にぶい黄橙色(10YR7/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
12	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山粒子・小礫・炭化物片含む。	
13	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
14	黒褐色(10YR2/2)	砂質シルト	炭化物片多く含む。	
15	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山ブロック含む。	
16	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	整地層（人為）
17	にぶい黄橙色(10YR7/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
18	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山粒子・小礫・炭化物片含む。	
19	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	
20	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	
21	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子・小礫多く含む。	
22	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
23	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山粒子多く含む。 焦色土ブロック少量含む。	
24	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
25	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山ブロック含む。	
26	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山粒子・小礫少量含む。	
27	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子・炭化物片含む。	
28	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	地山粒子含む。	
29	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質シルト	地山粒子含む。酸化鉄含む。	
30	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子含む。	
31	にぶい黄橙色(10YR7/3)	砂質シルト	地山ブロック・小礫多く含む。	平場構築土（人為）
32	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質シルト	地山ブロック・小礫多く含む。	

第32図　鷲足館跡 B区　緩斜面１　土層断面図









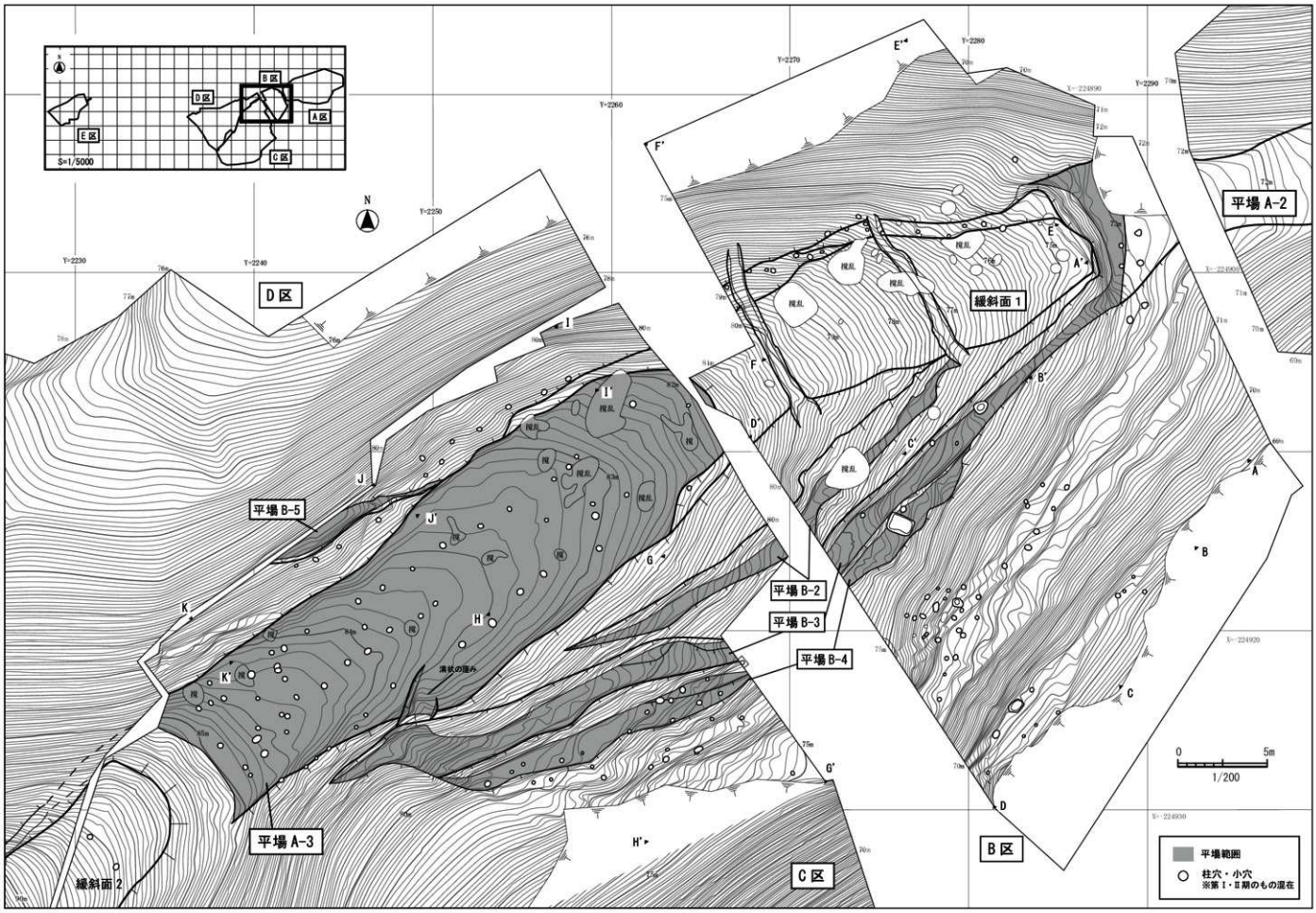
層	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	表土	基本層Ⅰ層
2	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山粒子少量含む。 旧表土（基本層Ⅱa）。	基本層Ⅱ層
3	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山粒子多く含む。 旧表土（基本層Ⅱb）。	
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子含む。	
5	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山粒子・焼化物片含む。	
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山粒子・焼化物片含む。	
7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子・小礫・焼化物片含む。	
8	にぶい黄褐色(10YR6/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
9	にぶい黄褐色(10YR6/3)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	
10	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子・地山ブロック少量含む。	
11	にぶい黄褐色(10YR7/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
12	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山粒子・小礫・焼化物片含む。	
13	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
14	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	焼化物片多く含む。	
15	灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	地山ブロック含む。	
16	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	第Ⅱ期整地層（人為）
17	にぶい黄褐色(10YR7/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
18	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山粒子・小礫・焼化物片含む。	
19	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	
20	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	
21	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子・小礫多く含む。	
22	にぶい黄褐色(10YR6/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
23	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	地山粒子多く含む。 黒色土ブロック少量含む。	
24	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子多く含む。	
25	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山ブロック含む。	
26	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山粒子・小礫少量含む。	第Ⅰ期堆積土
27	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子・焼化物片含む。	
28	にぶい黄褐色(10YR6/4)	砂質シルト	地山粒子含む。	
29	にぶい黄褐色(10YR6/3)	砂質シルト	地山粒子含む。酸化鉄含む。	
30	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子含む。	
31	にぶい黄褐色(10YR7/3)	砂質シルト	地山ブロック・小礫多く含む。	平場構築土（人為）
32	にぶい黄褐色(10YR6/3)	砂質シルト	地山ブロック・小礫多く含む。	

第33図　鷲足館跡 A区　平場A-1・平場B-1　土層断面図

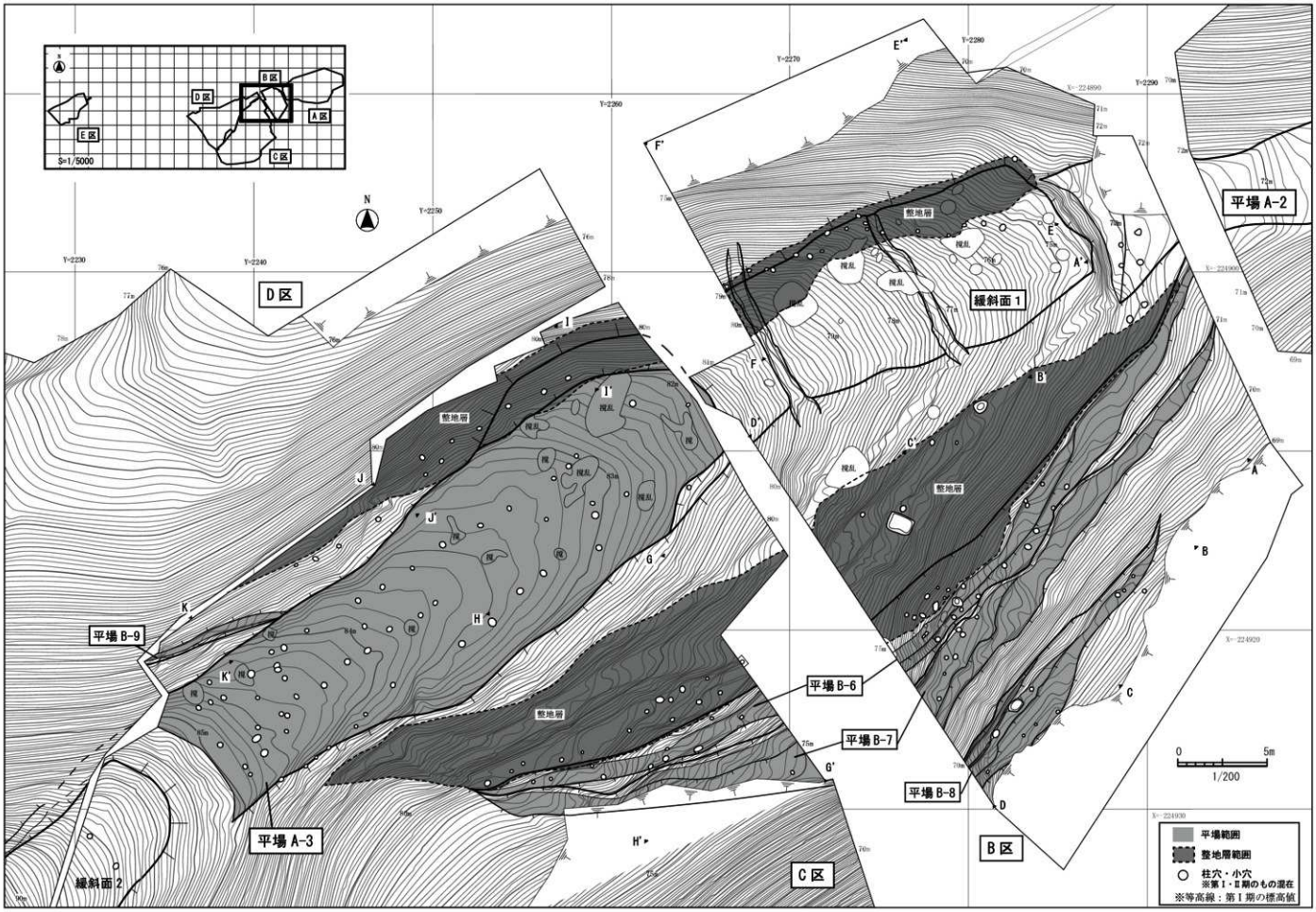
1. 緩斜面１ 北斜面～尾根上の状況（西から撮影）

2. 平場 A-3 平坦面～南斜面（平場 B-2 ～ 4・6・7）の状況（西から撮影）

第34図　緩斜面1・平場A-3の状況



第35図　鷲足館跡　平場A-3（第Ⅰ期）・緩斜面1（第Ⅰ期）・平場B-2～5　平面図



第36図　鷲足館跡　平場A-3（第Ⅱ期）・緩斜面1・平場B-6～9　平面図

（３）平場 A-4、平場 B-10（第 25・37～39 図）

【平場 A-4】（第 25・37～39 図）

［位置］　C 区の標高 95.3～97.0m の尾根上に位置する。平場 A-4 北西側の尾根上には急斜面を挟んで平場 A-5、東側の尾根上には平場 B-10 が所在し、北東・南西側は急斜面となる。

［検出遺構］　平場の平坦面上で、掘立柱建物跡 3 棟（SB17～19）、柱穴列跡 5 条（SA34～38）、柱穴・小穴 115 個（P432～546；うち、SB・SA を構成する柱穴は 62 個）を検出した。

［規模・形状］　北西-南東 12.6m、南西-北東 9.5m、面積約 120 ㎡で、北西-南東にやや長く狭い平場である。平場斜面の傾斜角度は、北東斜面が約 31～45°、南西斜面が約 25～35°、東斜面が約 25°である。

［整地層］　なし。

［出土遺物］　なし。

【平場 B-10】（第 25・38・39 図）

［位置］　C 区の平場 A-4 西側に延びる尾根の中央付近に位置する。検出位置の標高は 89.1～90.9m 前後である。

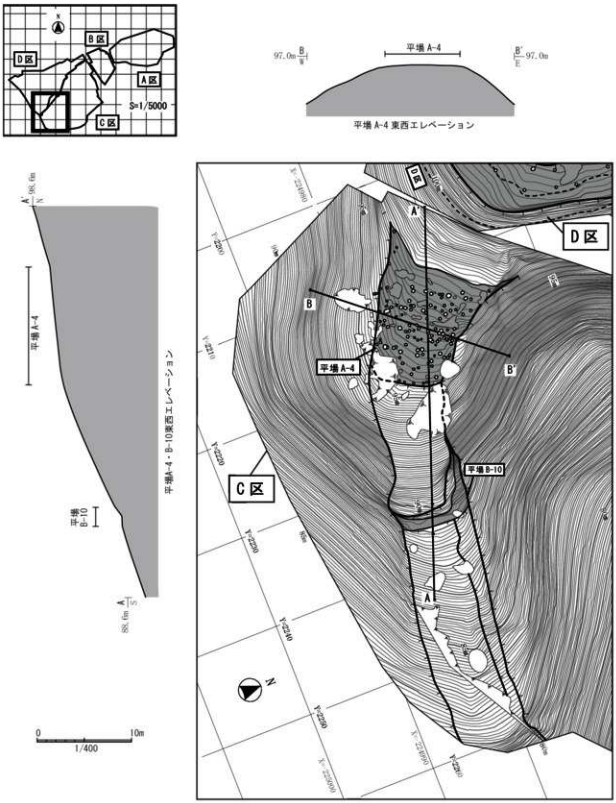
［検出遺構］　なし。

［規模・形状］　検出長約 13.9m、平坦面の幅が約 0.3～1.8m ほどの細長い平場で、西から東に向かって延びる尾根斜面を南北方向に分断する形で L 字状に配置されている。

［出土遺物］　なし。

1．平場 A-4 平坦面完掘状況（北西から撮影）

第37図　平場A-4の状況



第38図　鷲足館跡　平場A-4、平場B-10エレベーション図

層	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山粒子・小礫含む。
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山粒子・炭化物片・小礫含む。
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子少量含む。

第39図　鷲足館跡　平場A-4・平場B-10　平面図・断面図

（４）　平場 A-5、緩斜面 2、平場 B-11～14(第 25・40～45・119・120 図)

【平場 A-5】(第 25・40～42・44・45・119・120 図)

［位置］ D 区の標高 101.9～108.5m の尾根上に位置する。平場 A-5 南東部の東側尾根上には急斜面を挟み平場 B-11～14・緩斜面 2、南東側の尾根上に急斜面・平場 A-4 が所在し、平場 A-5 北西部の東・西側は急斜面となる。平場 A-5 の北西側は調査区外となるが、急斜面・平場がさらに続く。

［検出遺構］ 平場の平坦面で、溝跡 4 条(SD3～5・7)、掘立柱建物跡 11 棟(SB20～30)、柱穴列跡 29 条(SA42～70)、柱穴・小穴 289 個(P547～835：うち、SB・SA を構成する柱穴は 53 個)、整地層を検出した。整地層は平場の西端・南東端で確認している。

［規模・形状］ 北西-南東 57.9m 以上、南西-北東 10.3～22.9m、面積約 760 ㎡以上で、北西-南東方向に長く南東部分が広くなる平場である。平場 A-5 は非常に平坦な平場であり、平場北西部に位置する SD4・5 溝跡を境に、その北西側がさらに一段高くなる（第 41 図写真 1)。平場斜面の傾斜角度は、東斜面が約 40～42°、西斜面が約 40° 前後、南東斜面が約 30～40° である。

［整地層］ 平場の西端・南東端で確認した(第 44・45 図)。整地層は 8 層(第 44 図土層断面 A-A’～C-C’：1～8 層）に分けられ、地山粒子・ブロックを多く含み、しまりは強い。その厚さは北端の整地層で 10cm～200cm ほどである。整地層の直下には旧表土は残存しておらず、地山の直上に盛土をしていることから、平場端部の地形を段状に掘削した後、その上に盛土を行うといった工程で形成された整地層であると考えられる。こうした状況から、平場 A-5 の整地層は、既存の平場の改修に伴うものではなく、平場の造成時のものと考えられる。

［出土遺物］ 平場南東端の整地層で須恵器壺破片 1 点（55g)、平場の平坦面北西部の遺構検出面で和鏡 1 点（265g）が出土し、このうち和鏡 1 点を図示した（実測図：第 119 図 18、写真：第 120 図)。

［その他］ 平場西・東端の整地層 2・5・8 層（第 44 図土層断面 B-B’・C-C’）に含まれていた炭化物片（試料 No：東端 2 層 WA-6、東端 8 層 WA-7、西端 5 層 WA-8）の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は WA-6 が 1299～1391cal AD、WA-7 が 1320～1405cal AD 、WA-8 が 750～514cal BC であった。

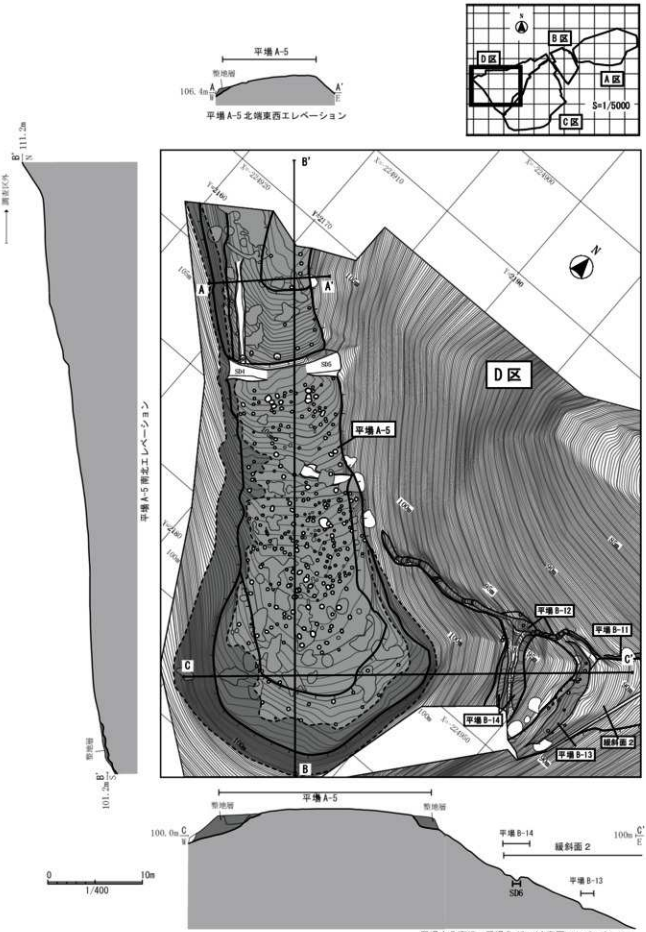
1. 平場 A-5 平坦面 北西部分　完掘状況（南東から撮影）

第40図　平場A-5の状況（1）

1．平場 A-5 平坦面 北西部分（SD4・5付近）　完掘状況（西から撮影）

2．平場 A-5 平坦面 南東部分　完掘状況（北西から撮影）

第41図　平場A-5の状況（2）



第42図　鷲足館跡　平場A-5、平場B-13・14エレベーション図

【緩斜面 2】（第 25・42・44・45 図）

［位置］ C・D 区の標高 86～96m の尾根上に位置する。平場 A-3 と平場 A-5 の間に位置する尾根上の斜面のうち、平場 A-3 と平場 B-14 の間の傾斜角度が 20° 前後で比較的傾斜が緩い斜面を「緩斜面 2」として取り扱った。緩斜面 2 の北端には平場 B-11・B-12、西側の尾根上に平場 B-13・14 が所在し、平場 B-14 のさらにその西側が傾斜角度 40° 前後の急斜面となり、平場 A-5 の平坦面に至る。

［検出遺構］ 尾根上の緩斜面東側で、柱穴列跡 1 条（SA33）を検出した。位置的にみて、緩斜面 2 に伴う遺構と考えられる。

［規模・形状］ 東西 23.6m、南北 5.6～12.3m ほどの西-東方向に細長い緩斜面である。

［出土遺物］ 平場 B-13 東側尾根上の遺構検出面で土師器坏破片 1 点（20g）、かわらけ皿破片 1 点（5g）が出土した。いずれも小破片のため図示できなかった。

【平場 B-11】（第 25・42・44・45 図）

［位置］ D 区緩斜面 2 の北端の斜面上に位置する。検出位置の標高は 87.9～90.8m 前後であり、平場の東端が低く、西端が高い。平場 B-11 の南西側は平場 B-12 の東端付近で途切れるが、位置的にみて本来は平場 B-12 と接続していた可能性が高い。また平場 B-11 の北東側は急斜面のため残存していないが、東側に位置する平場 A-3 に接続していたと考えられる。

［検出遺構］ なし。

［規模・形状］ 検出長約 6.8m、平坦面の幅が約 0.2～0.6m ほどの南西-北東方向に細長い平場である。

［出土遺物］ なし。

【平場 B-12】（第 25・42～44・45 図）

［位置］ D 区緩斜面 2 の北端の斜面上に位置する。検出位置の標高は 90.9～101.5m 前後であり、平場の東端が低く、西端が高い。平場 B-12 の東端は平場 B-11 の西端と接続する可能性が高い。また、標高 95m 付近で SD5 溝跡の北端部と接続する位置関係にある。平場 B-12 の西端は標高 101.5m 付近で途切れる。

［検出遺構］ 平坦面上で柱穴・小穴 2 個（P854・855）を検出した。これらは平場 B-12 に伴うものとみられる。

［規模・形状］ 検出長約 27.7m、平坦面の幅が約 0.2～1.3m ほどの東西方向に細長い平場である。平場 B-12 の東側は階段状に造成されている（第 43 図写真 1・第 44 図・第 45 図拡大図参照）。

［出土遺物］ なし。

【平場 B-13】（第 25・42～44・45 図）

［位置］ D 区緩斜面 2 の尾根上に位置する。検出位置の標高は 91.6～92.1m 前後である。

［検出遺構］ 平坦面上で柱穴列 3 条（SA39～41）、柱穴・小穴 15 個（P836～851：うち、SA を構成する柱穴は 13 個）を検出した。これらは平場 B-13 に伴うものとみられる。

［規模・形状］ 検出長約 12.8m、平坦面の幅が約 0.6～1.9m ほどの細長い平場で北東から南西に向かって延びる緩斜面 2 の尾根を南北方向に分断する形で弧状に配置されている。

［出土遺物］ なし。

【平場 B-14】（第 25・42・44・45 図）

［位置］ D 区緩斜面 2 の尾根上に位置する。検出位置の標高は 94.5～96.1m 前後である。平場 B-14 の西側は傾斜が 40° ほどの急斜面となり、その上に平場 A-5 が所在する。

［検出遺構］ 平坦面上で溝跡 1 条（SD6）、西側の斜面で柱穴・小穴 2 個（P852・853）を検出した。これらは平場 B-14 に伴うものとみられる。

［規模・形状］ 検出長約 8.5m、平坦面の幅が 2.8m ほどの細長い平場で北東から南西に向かって延びる緩斜面 2 の尾根を南北方向に分断する形で配置されている。

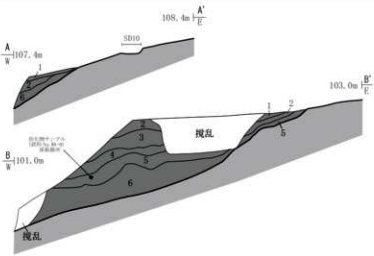
［出土遺物］ なし。

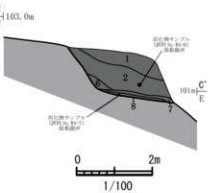
1．平場 B-12 東半（階段状範囲）　完掘状況（北東から撮影）

2．平場 B-13 平坦面 完掘状況（北から撮影）

第43図　平場B-12・13の状況

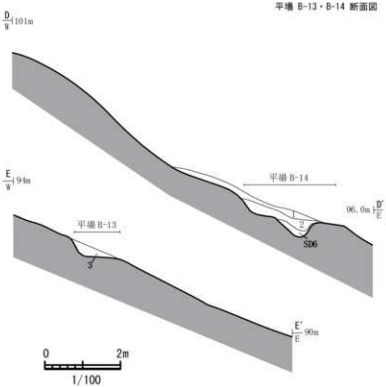
平場 A-5 斜面 断面図





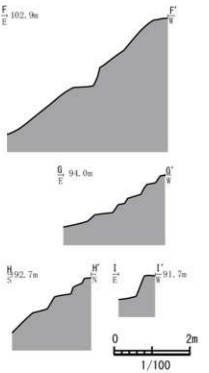
層	土色	土性	備考	
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山ブロック多く含む。	整地層（人為）
2	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山ブロック・炭化物片・黒色土ブロック含む。	
3	にぶい黄橙色(10YR6/3)	砂質シルト	地山粒子・地山ブロック含む。	
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	地山粒子少量、炭化物片含む。	
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質シルト	地山粒子少量、炭化物片含む。	
6	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	地山粒子多く含む。小礫含む。	
7	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子少量含む。	
8	黒褐色(10YR3/1)	砂質シルト	炭化物片多く含む。	

平場 B-13・B-14 断面図

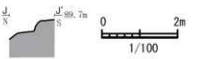


層	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒子・炭化物片含む。	平場B-14 堆積土
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山粒子・地山ブロック含	
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山粒子含む。	平場B-13 堆積土

平場 B-12 エレベーション図



平場 B-11 エレベーション図



第44図　鷲足館跡 平場A-5・B-13・14 土層断面図、平場B-11・12 エレベーション図